勝瑞城シンポジウム

「戦国期・武家の館」

2016. 3

主催：藍住町・藍住町教育委員会

勝瑞城シンポジウム～戦国期・武家の館～

〈趣旨〉

全国各地では、戦国期の武家館の発掘調査例が増えてきています。そこには、建物跡や庭園、その他様々な空間や施設が検出され、また、かわらけをはじめ多くの遺物が出土しています。それらの考古学的な情報から得られる戦国期の武家館の諸相から、勝瑞城館跡の深層について考えたいと思います。

主　催：藍住町・藍住町教育委員会
日　時：平成２８年３月１２日（土）　１２時３０分～　受付
会　場：藍住町コミュニティセンター　町民シアター（藍住町合同庁舎４階）
〒771-1292　徳島県板野郡藍住町奥野字矢上前 52-1
℡　０８８－６３７－３１３０

〈日程〉

１２：３０～	開場
１２：５０～１３：００	開会行事
１３：００～１４：００	基調講演 「戦国期武家館の景観とその意味」 講師：小野正敏（前 人間文化研究機構理事）
１４：１０～１４：４０	事例報告Ⅰ 「真壁城跡、小田城跡の調査成果」 報告者：宇留野主税（桜川市教育委員会）
１４：４０～１５：１０	事例報告Ⅱ 「小田原城跡の調査成果」 報告者：佐々木健策（小田原市）
１５：２０～１５：５０	事例報告Ⅲ 「大友氏館跡の調査成果」 報告者：五十川雄也（大分市教育委員会）
１５：５０～１６：２０	事例報告Ⅳ 「勝瑞城館跡の調査成果」 報告者：重見髙博（藍住町教育委員会）
１６：２０～１６：３０	事務連絡・閉会行事

戦国期武家館の景観と意味

小野正敏

はじめに

平成６年度から続く勝瑞城館の発掘調査は、大きな成果を発信している。今回のテーマである戦国期大名権力の本拠の景観を考える上でも勝瑞は不可欠の遺跡である。これまでに各地で大名クラスの城館が調査されているが、畿内の遺跡からの実態は、まだ不明なことが多い。こうした中、都周辺に位置し、この時期の幕府中枢、管領細川氏の一族である阿波守護館の存在が推定され、また５年間という短期間ではあるが、都の実権までも握った三好氏の阿波における本拠地としての勝瑞が調査される意味は大きい。

後述するように、この時代には将軍をはじめ都がもつ権威モデルとしての意味は大きく、それにもっとも近い権力としてその実態が検討できる重要な遺跡と位置づけられる。これまでは考古学的に地方から中央を推定するしかなかったが、これからは双方向の議論が可能になるのだといえよう。そのキーが勝瑞館なのである。

ここでは、これまでの発掘成果から見えてきた勝瑞館の景観と意味をどう読むか、各地の発掘例をまじえて考えてみたい。

１　戦国大名館の景観と空間概念　（図１，２）

・「ハレ」と「ケ」、「表（端）」と「奥」の空間概念

福井県・一乗谷にある戦国大名朝倉氏の館を例に戦国期の大名館を概観する。ここは天正元年（１５７３）に天下統一を目指す信長軍の戦火で焼け落ちたため、館の建物群や庭園などの諸施設がそっくり地中に保存された遺跡である。また、永禄１１年（１５６８）には後に将軍となる義秋の御成があり、記録に残されている。ここは発掘した遺構に文字史料を重ねることにより館の建物群をはじめ空間の具体的な呼称や使われ方が検討できる数少ない例である。

館は、堀と土塁で方形に区画された約１００ｍの規模で、西に表門（礼門）をもつ。表門を軸にして、北半には台所など館の日常機能を支える「ケ」の空間があり、南半には儀礼や行事などが行われる「ハレ」の空間が広がる。接客空間には、表と奥のふたつの空間概念があり、儀礼や行事によりその空間を使い分けている。表は主殿と広庭を中心に構成され、御成では将軍（候補段階）と大名朝倉氏の主従関係を確認する「式三献」の儀礼に使われ、会所と庭園を主に構成される奥では、酒宴と能、茶の湯などが開催された。会所は連歌や和歌、茶・花・香など文芸や芸能などのために身分を超えた集まり（寄合）にも使われる中世に特徴的な空間であった。

このような空間概念は、朝倉館に限ったことではなく、大分県・豊後府内大友館や青森県・八戸根城（南部氏）などにも共通するものである。儀礼・行事に関わる空間や建

物群の使われ方も共通することが多い。その背景には、大名クラスなど一定の権力においては、慣例に則った儀礼や行事、それを行う建物や場は権威を誇示する手段として必要不可欠なものであり、儀礼とセットで建物や空間も含めて、そのモデルを将軍邸など都に求めたことによると考えられる。その一方、八戸根城のように権力によっては、直接的な都のモデルを受容せず、逆に建物や庭園をもたないなどの具体的な構成要素、景観に地域の論理を表現することでアイデンティティーを主張する地域がある。これは中央と地方、権力の個性を考える上で重要な意味をもつが、建物群などの館の全体像が発掘されていない遺跡も多く、比較検討に大きな課題が残されている。

２　権威の象徴としての館（図３）

・「家格」を表現する館景観

館は権力の場として、必然的にその規模や景観が権力の格を表現することになる。一乗谷では、城下町の各階層の屋敷が発掘されたことで、朝倉氏を主人とする城下町という小宇宙全体を比較することが可能となった。そこでは館や屋敷の景観に大名朝倉氏を頂点とする明瞭な階層性が確認される。具体的には、規模、門・外構施設、建物の機能分化と意匠、庭園に示される。例えば城戸の内で堀と土塁で区画されるのは朝倉氏当主の館と母親の館である中の御殿、同名衆筆頭朝倉景鏡館だけであり、他の武家屋敷は規模の小さな土塁による。また、館や屋敷内に池庭をもつのは、寺院を除くと朝倉館と中の御殿、諏訪館だけで、武家屋敷は平庭である。当然そこには厳格な規制があったものと考えられる。

「洛中洛外図屏風」の公方（将軍）邸、管領邸、典厩邸の描き分けは、まさに都の洛中における館屋敷の階層性をみごとに描き分けている。例えば、管領は京兆と呼ばれた細川惣領家、それを補佐した典厩は弟などの庶流という関係が、屋敷規模、表門に使われた平唐門と棟門、主殿への正式な入り口である中門の唐破風の有無、池庭と平庭などの格式差として視覚的に表現される。さらには、その管領邸が板葺き屋根であるのに対して、将軍邸は檜皮葺きで描かれている。館屋敷の景観は、まさに家格を象徴している。

３　細川館と三好館　（図４，５）

勝瑞のこれまでの発掘では、約１００ｍを超す方形のⅠの曲輪とその西側に少し規模の小さいⅡやⅢ、Ⅳなど複数の曲輪が確認されている。堀の巡り方や規模からⅠが主たる曲輪であり、地割りが先行することからここが中心であることがわかる。また１５世紀代の発掘遺物が東部に偏る傾向が報告され、東側のエリアが早くから使われていたと考えられている。

Ⅰの発掘部分は館の西側半分に相当し、そこに大規模な池庭と、それに面した①、②を含む４棟の礎石建物、離れて１棟の小規模建物⑤が発掘されている。つまり発掘区域は庭園をめぐる「奥」空間に相当する。池庭は主として北側の建物群から鑑賞するよう

に構成されている。建物①、②は建物間や池との間に五色の玉砂利が敷かれており、①または②が会所であろう。小規模建物⑤には石組み溝をもつ「つくばい」的な施設が付属しており、数寄屋空間と考えられる。建物群の東側はほとんど未発掘だが、広場的な整地が検出されたことが報告されている。Ⅰは東に表門をもつ東礼の館と予想される。一方、西のⅡでは、枯山水の庭とそれに面した会所と考えられる礎石建物が発掘され、Ⅲでも数棟の礎石建物群が発掘されている。いずれも各曲輪の全体像は不明である。

このⅠを阿波守護細川氏の館、西の曲輪群に三好氏の館を推定したい。なぜそのように考えられるか。

守護細川氏が秋月から勝瑞へ守護所を移転したのは１５世紀半ばから後半とされており、勝瑞の発掘で遺物が確認され始める時期に相当する。一方、三好氏が実権を握るのは１６世紀前半から中葉と考えると、現在発掘されている東勝地の主体は守護細川館から始まり、その後三好氏に関わる部分が膨張していったという流れが考えられる。

天文２２年（１５５３）に三好実休と十河一存によって阿波守護細川持隆が殺害された後も、眞之が守護を継ぎ、勝瑞には守護細川家と三好長治の併存状況が続いた。長治が篠原父子を掃討するときには軍勢催促が守護公権として眞之から出されたという須藤茂樹氏の指摘は、守護細川家を主家とする長治の立場を明確に示している。

そうした状況を背景とすれば、東のⅠの館の地割りの先行性とともに、一乗谷や洛中洛外図の例にみたように、権威空間に示される建前の身分階層性は非常に強く、守護家がある限り三好館はそれを超えることはできなかったのだと考える。こうした視点にたつと、最も整備された池庭をもつⅠの館は守護細川館と推定するのが妥当であり、現在の発掘成果のなかで三好館を探すとすれば枯山水をもつⅡ、Ⅲなどが比定されるのではないだろうか。

４　権威空間を復元する（図６）

大名クラスの館のハレ空間の復元を、勝瑞に縁が深い三好義長邸などの御成記事からみてみよう。

・三好義長（義興）邸と朝倉義景邸、北条氏康邸の御成

永禄４年（１５６１）３月３１日、京都立売の三好筑前守邸に将軍義輝の御成があった。これは三好長慶の長男義長（義興）が松永久秀とともに将軍から御相伴衆の栄誉を得たことへの礼である。御成に際して古御殿を改造している。「主殿の破風」と築地の「冠木門」、さらに「三間厩」「便所」を新築した。破風は主殿の入り口中門の格式をつけるためだが、なぜか表門はもっとも格式の低い冠木門である。通常、御成のために新築、改造を行うが非常に規模が小さい。献上馬の引き方にも庭や屋敷が狭かったことがうかがわれる。

そのためか通常はプログラムの第１部「式三献」が主殿、２部「饗宴・献儀・観能」が会所となるが、建物を替えることなく、主殿の四間（八畳敷き）と九間で行われてい

る。

四間には、唐物を飾るための押板と違棚があり、押板には唐絵の山水画と陶磁器の香炉・花瓶・燭台の三具足が飾られ、違棚には台に載った天目茶碗と湯瓶、唐物漆製の重箱のような食籠が飾られた。義輝の座の右側には文台があり、硯箱や紙、文鎮がのる。九間にも押板があり、唐絵三幅と三具足が飾られた。奥の四畳半が休息所で、茶の湯道具が台子に飾られている。能舞台は饗宴の会場九間の前の広庭に作られた。

その３年まえの永禄元年（１５５８）４月２８日の関東公方足利義氏の小田原の北条氏康邸への御成を見てみよう。

ここでは１部が寝殿（主殿の前代的呼称）、２部が会所で行われ、当主邸でないためか饗宴は五献までの略式となる。会所？の押板に唐絵三幅と三具足（花瓶は青磁）、違棚には建盞（中国製天目茶碗）と天目台、下には唐物薬籠が飾られた。

・唐物荘厳を主とした室礼と威信財

みてきたように、儀式や建物、その座敷飾りなど、朝倉館を含め、いずれもおよそ同じように行われたことが確認される。こうした権威を誇示する儀礼・行事の場が、唐物による座敷飾りの場であり、儀礼のみならず室礼にも「こうあるべし」という規範が重視されたことが特徴である。この規範こそが都のモデルであり、義長邸が御成に際して唐破風を付けるように指示されたことにも通じる。また、こうした規範の手引きの一部が、足利義政東山殿の座敷飾りや唐物分類を記したとされる「君台観左右帳記」であり、大内義興が幕府の有職故実の伊勢から聞き取った「大内問答」ということになる。

各地の館の発掘では残念ながらこうした唐絵や漆製品、金属製品をみることは困難だが、館の建物や庭園などが類似する空間構成をとることや、座敷飾りなどに使われた高級陶磁器に共通する器種の組み合わせをみることが、規範性の反映と考えている。だからこそこれらを単なる贅沢品ではなく背景に規範性をもつ威信財という視点でとらえることが有効なのである。

４　槍や鉄砲だけでは生き残れなかった戦国大名

強力な武力を手段に実力支配を推進する戦国大名にとって、時には都を追われ、実質的に軍事力も政治力もない落ち目の将軍がなぜ権威をもち、将軍邸が大名館のモデルになりえたのか。ふたつの必要性を考えたい。

・戦国大名間に対して

戦国時代の論理からは逆説的だが、戦国大名が覇権拡大を推進するとき、他と同じ武力だけではない優越性、都の上位権威（将軍、天皇）からの「公」の大義名分や家格の授与、保証は覇権の正当性を語り優位に働いたと考えたい。具体的には、この時期に天皇が授与する官位、将軍が発給する守護職や「御相伴衆」などの栄誉が大名の求めに応じて乱発されている。例えば小田原城の北条氏綱が官位を得て伊達氏、武田氏など周辺大名と同格になることで相模・武蔵支配の正当性を主張する。１５５０年に山口の大内

義隆を滅ぼした陶晴賢も大友氏から迎えて大内義長として推戴し、彼への官位をもらうことで正当化を図っている。特に西国や東国などのいわゆる遠国では実質的な効果があったとされる（今谷明氏による）。こうした旧制的な権威による秩序が再利用されていく時期や動静に連動するように、それを契機に都の権威を象徴するハードやソフト、具体的には都型の館空間（建物、池庭など）と儀礼、それに伴う座敷飾り等の威信財、京都系かわらけなどが、各地の大名に積極的に受容されていくのは時代の必然であった。

・家中をはじめ領国内の小領主に対して

もうひとつ忘れてはならないのが、逆に領国の内に向けた必要性である。戦国期の大名権力はいわれるほど堅固なものではなく、常に家中や領国内の領主たちとの良好な関係を確認し、強化する必要があった。そのために、都の権威を体現する館空間を舞台として、年頭儀礼をはじめとする年中行事や代替わりの際の儀礼が、政治的、実効的な必要性を増していたといえる。「当家年中作法日記」（大友氏）、や「八戸家伝記」（八戸南部氏）、「色部氏年中行事」（越後色部氏）などの家行事を有職故実的に記録した例や各地の発掘事例は、トップの大名のみならずその下の領主層にもこうした儀礼・行事が内容は格落ちしながらも入れ子状に受容された状況を示しており、大名や領主の権力維持装置として必要不可欠なものになっていたのである。

参考引用文献

重見高博２０１５　「守護町勝瑞遺跡の発掘成果―勝瑞城館及び勝瑞城下町の空間構造の変遷」『阿波の守護所・城下町と四国社会』
須藤茂樹２００９「文献史料から見た守護町勝瑞」『阿波国守護の空間構造をさぐる』
須藤茂樹２０１５「勝瑞館跡関係資料集」『阿波の守護所・城下町と四国社会』
今谷　明１９９２「戦国大名と天皇」
池　　亨２００９「戦国大名と一揆」日本中世の歴史６

史料１

「三好義長邸御成の室礼」　永禄４年（１５６１）３月３０日

・四間の飾り

弓、征矢、鎧

「押板一間半」　二幅一対（山水　馬鱗）、三具足（何れも茶碗物＝陶磁器）卓に

「違棚」　盃（天目か）・同台盆に、下重に湯瓶、下に食籠

「文台」納戸構の右、硯箱、引合、杉原、文沈、文台に

・九間の飾り

「押板二間」　三幅一対（中は王義之、脇は王輝）、三具足（胡銅と陶磁器の花瓶、蝋燭金）卓に

・奥の四畳半　茶の湯道具

茶碗・同台、茶杓、茶壺、茶筅、茶巾、盆、水指、水こぼし（建水）、柄杓立、火箸、かくれが（蓋置）、台子に

史料２

永禄元（１５５８）年４月２８日

「義氏将軍北条左京大夫氏康私宅御成」（「鶴岡八幡宮社参記」）

・未刻御成　妻戸の前に立砂、

・「寝殿」；式三献　　弓、征矢、鎧甲、栗毛馬、銀剱

・「会所」；五献の各進物

初献；太刀

二献；唐絵三幅一対（中尊　率翁、脇　李龍眠筆）

三献；太刀

四献；盆（桂漿）・香合（堆朱）

五献；太刀

・座席之飾

「押板」　三幅一対、三具足（香炉、鶴の燭台、花瓶青磁）

「違棚飾」

上ノ重　烏盞之茶椀并台堆紅（＝建盞と天目台）

下ノ重　薬籠盆ニ置

史料３

「公方様御元服付而御成」　永禄１１年（１５６８）４月２１日

・御沓形の御座敷の飾り

「押板」　唐絵三幅一対（本尊円相観音　馬遠、脇鷹・猿猴　牧渓）、三具足（胡銅、卓に）

唐絵一幅　（山水　牧渓）、花瓶（胡銅、卓に）

「棚」　茶垸・台、盆に、茶籠盆に湯瓶・茶垸（青磁）、食籠・香炉

「書院」　双花瓶（胡銅）

「厨子の棚」　勅筆和漢朗詠集２巻、春秋左氏伝１０冊・文沈

「文台」　硯（蒔絵雁八橋）、文沈、引合１帖、杉原１帖、火取香合、長盆に

「台子の中」茶湯

小壷（茶入）、建盞、水さし（真の手桶）、柄杓立、水こぼし（建水）

釜、風炉、蓋置き、

「たんすの中」

建盞２（金銀）、同台２，茶筅おき茶椀

図１　朝倉館模式図

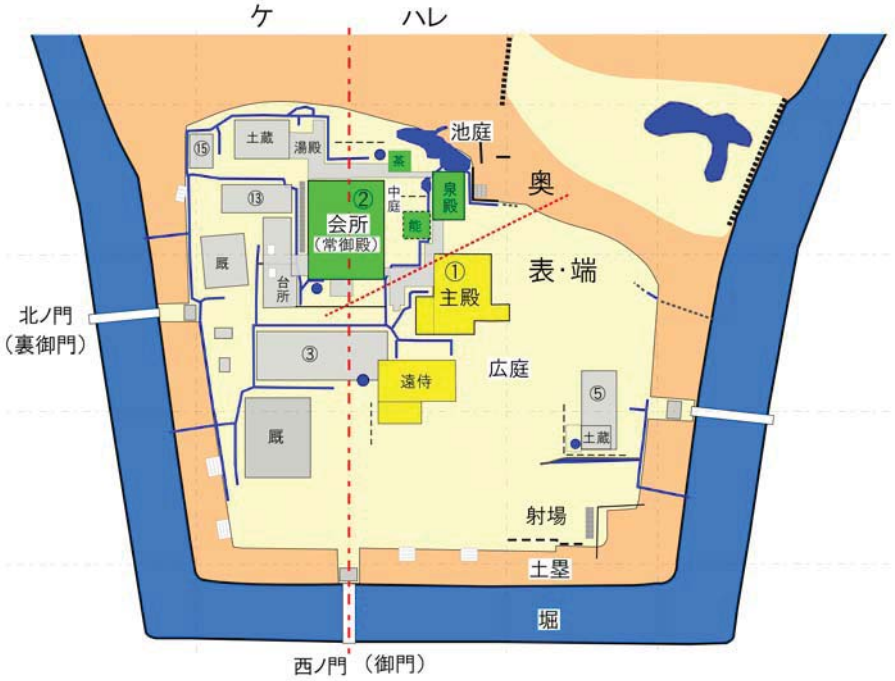


図２　都型館屋敷の空間概念

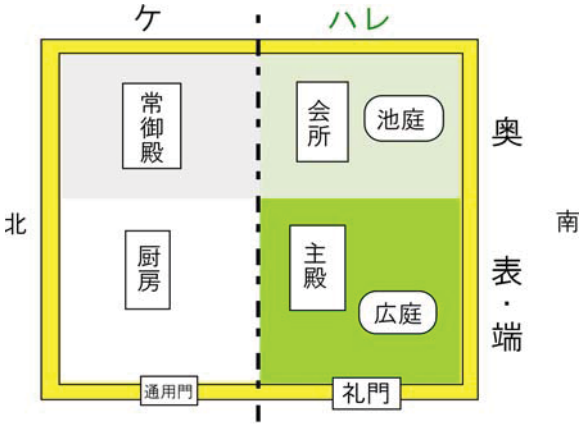


図３　洛中洛外図・細川管領邸、典厩邸の比較（平井聖１９８２「図説日本住宅の歴史」）

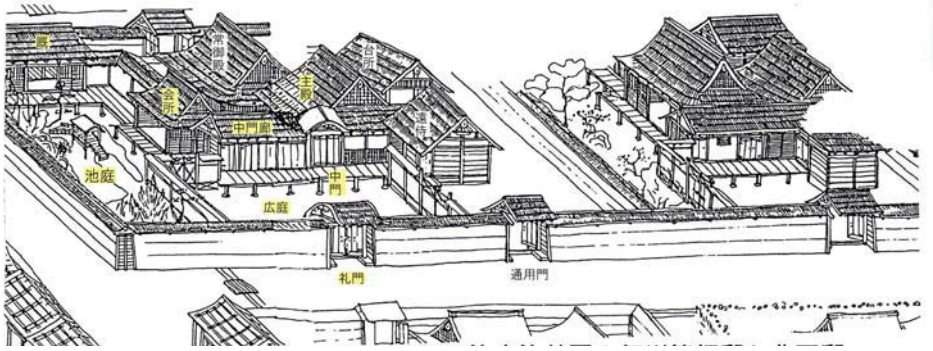


図４　勝瑞館の発掘　（藍住町教委提供図に加筆）

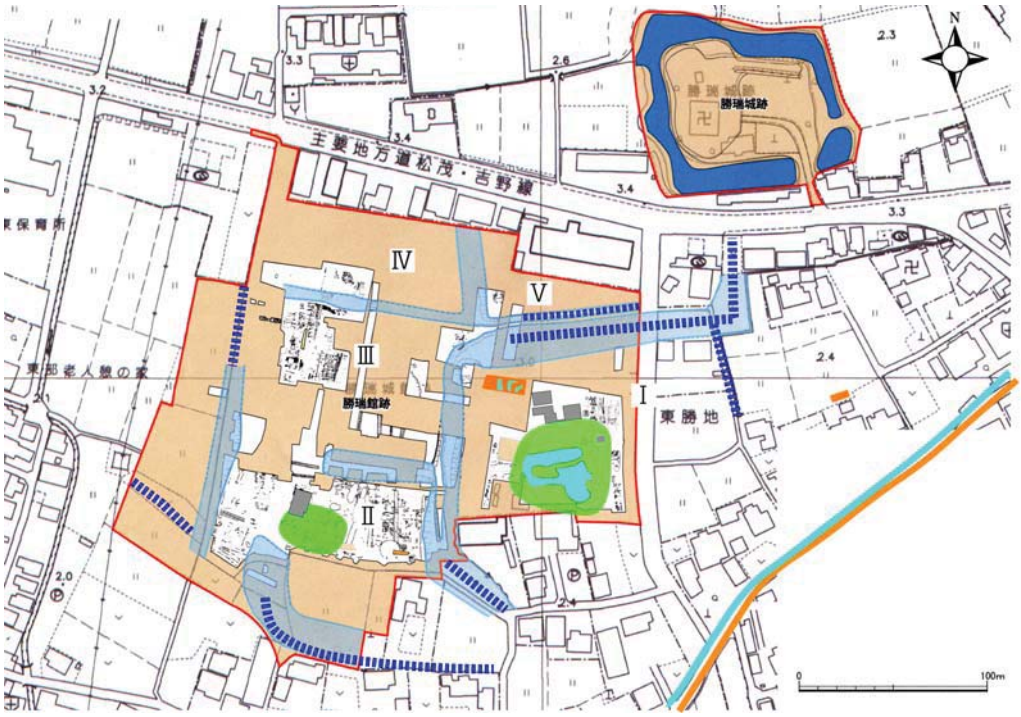
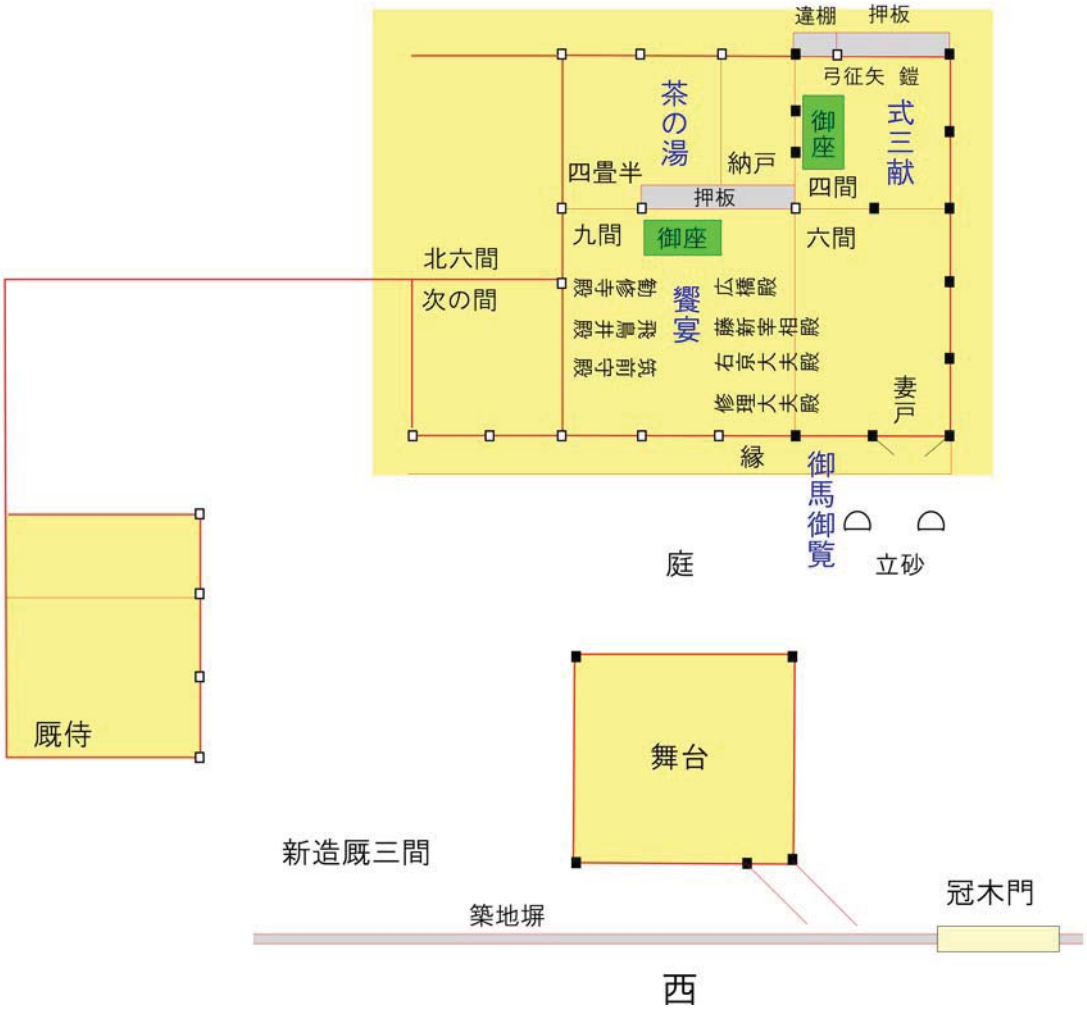


図５　勝瑞館Ⅰの池庭と建物（藍住町教委提供図に加筆）

図６　三好義長邸御成


違棚
押板
弓征矢
鎧
茶の湯
御座
式三献
四畳半
納戸
四間
押板
九間
御座
六間
北六間
次の間
饗宴
傳奏殿
手殿
飛鳥井殿
殿
筑前殿
丘橋殿
藤新宰相殿
右京大夫殿
修理大夫殿
妻戸
縁
御馬御覧
立砂
庭
厩侍
舞台
新造厩三間
築地塀
冠木門
西

勝瑞城シンポジウム～戦国期・武家の館～

報告Ⅰ　真壁城跡（まかべじょうあと）、小田城跡（おだじょうあと）の調査成果

平成 28 年 3 月 12 日　宇留野主税（茨城県　桜川市教育委員会）

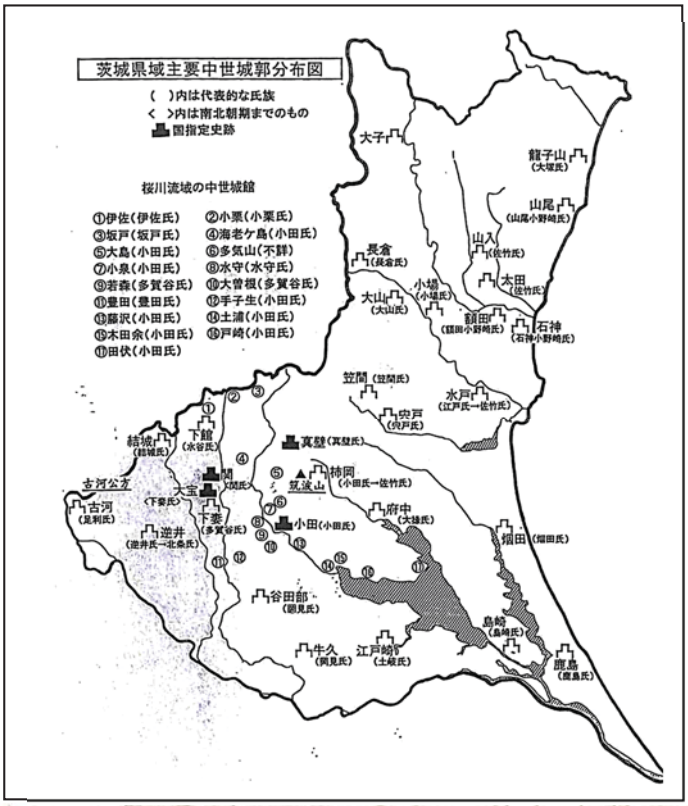
はじめに

【主な内容】

○関東北東部、茨城県（旧常陸国）の城館。
　真壁城跡と小田城跡の発掘成果（国史跡）。

○鎌倉時代から安土桃山時代という長期間、
　拠点を経営した武家の戦国期城館と庭園。

○豊臣秀吉の天下統一や肥前名護屋在陣を経た、中近世移行期の慶長 7 年（1602）廃城。
　江戸時代（1603 年）直前の城館・庭園。



【図7】1587（天正15）年
九州平定（5月）

佐賀県立名護屋城博物館展示図録 2005『秀吉と城』より

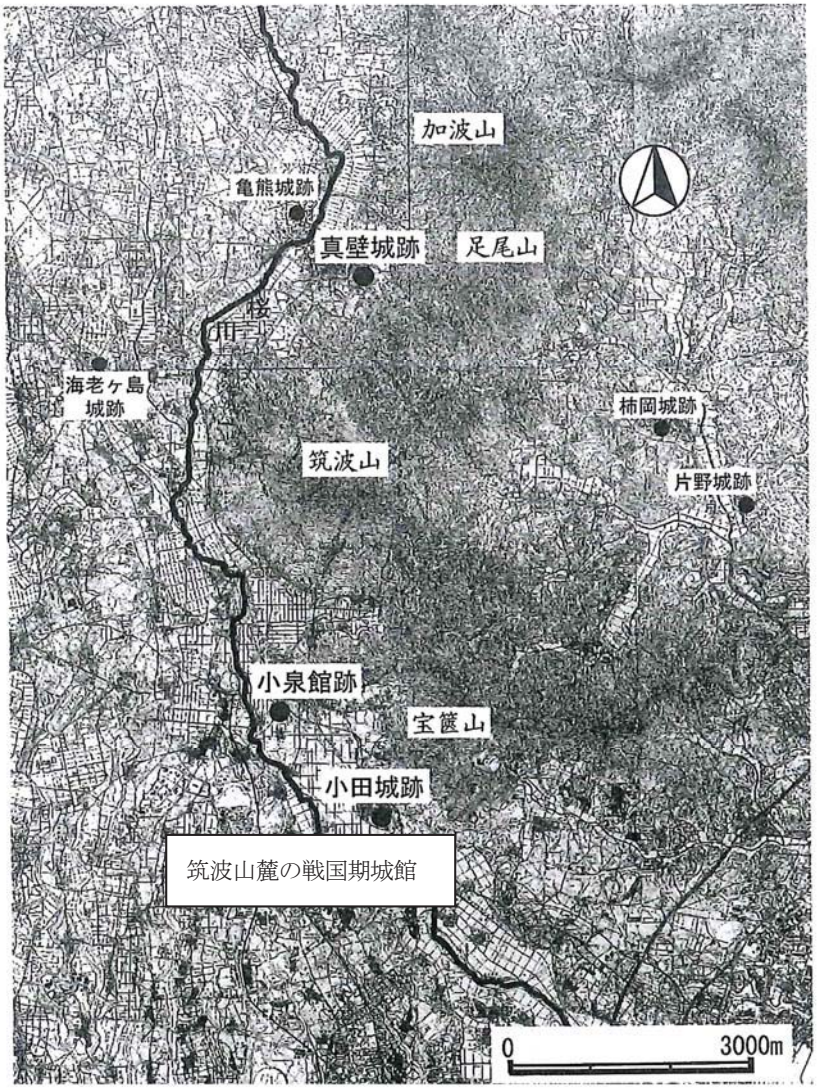
（1）立地と環境

真壁城と小田城は、ともに茨城県（旧常陸国）の名峰・筑波山（つくばさん）の麓にある武家城館。

筑波山は美しい自然景観であり、文化的景観でもある。

筑波山周辺は万葉集をはじめとする古代・中世の歌に詠まれ、山岳信仰も営まれた地域。

真壁城は筑波山の北、小田城は筑波山の南にあり、ともに、城内から筑波山を望む場所に位置している。



◆真壁城の立地

（茨城県桜川市真壁町古城）

茨城県西部に位置する。

筑波山地から北西に延びた山尾地区の尾根が平地へと至る、微高地上の平城。

中世真壁氏の拠点・真壁郡は、現在の桜川市南部（旧大和村・旧真壁町）を主な範囲とする。

中世真壁郡であった地域の中央は現在も桜川が流れている。この川を境に、東方の山麓から低地部は真壁一族の領地となっていた。一方、桜川西方の広大な真壁台地は、平安～戦国時代に関西方面から移住し、真壁氏家臣になったという伝承を持つ家が複数ある。

この、東と西の地域の間には、桜川と低地が広がる。戦国期の真壁城と城下は桜川低地をまたいで両地域をつなぐ、巨大な土橋のような地形上にあった。ここは地域全体の結節点であり、中世真壁郡全体の「拠点」として、ふさわしい場所である。しかし小田氏と異なり、15 世紀以前の拠点は定かでなく、14～15 世紀は真壁台地の亀熊城等、拠点の移転説が有力である（齋藤 1994）。

◆小田城の立地　（茨城県つくば市小田）

茨城県南部に位置する。筑波山地から南東に延びた宝篋山南裾の低位段丘上の平城。

小田城主・小田氏は下野国・宇都宮氏一族・八田氏を祖とし、鎌倉時代に小田を拠点とした。

平安時代末期、小田も含めた筑波郡は、常陸平氏本宗・多気氏の拠点であり、常陸平氏一族は常陸南部一帯に強大な勢力を有した。八田氏は多気氏を滅ぼし、東国の先進地でもあったこの地を拠点とする（小野 2004、市村 2013）。戦国時代以降の小田氏は、この筑波山南麓を中心に、茨城県南部に影響力を及ぼしたが、その拠点は移動せず、終始一貫して小田城であった。

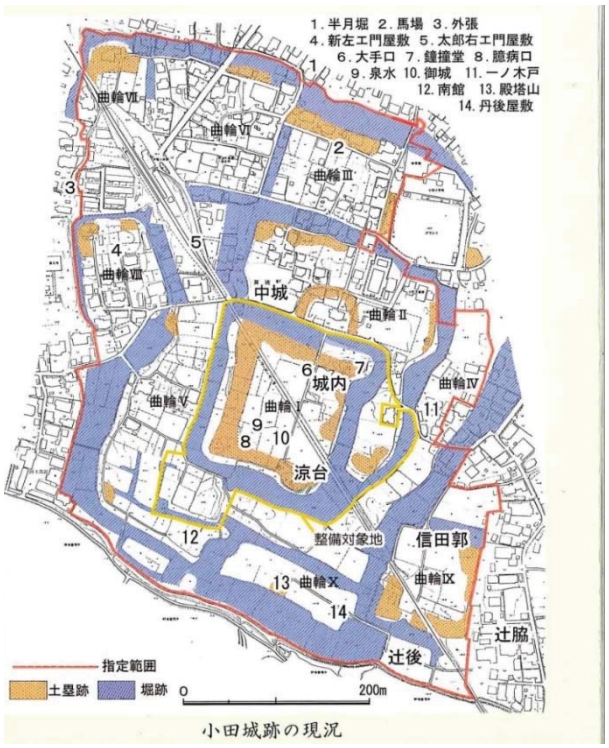
（２）歴史概略（真壁城詳細は付表参照、小田城はパンフレット参照）

名称	真壁城跡（国史跡）	小田城跡（国史跡）
階層	幕府御家人（鎌倉時代） 国人領主（室町時代）	常陸守護（鎌倉時代） 関東八屋形（室町時代）
概略	平安末期、常陸平氏一族の平長幹が、真壁郡司として郡名真壁を名乗る。その先祖は、平将門の乱を鎮圧した平貞盛の弟・平繁盛（しげもり）の家系。 現況の城跡は 15 世紀中葉に構築。それ以前は、近隣の山尾地区や真壁台地の亀熊城が拠点で、拠点の移動があった。 真壁氏は中世を通じて真壁郡を統治したが、15 世紀前半に惣領家が没落し、15 世紀後半以降庶子家が再興した。後に佐竹氏と関係を深め、臣従する。	小田城の城主は小田氏。平安末期から鎌倉の宇都宮氏一族・八田氏（源義朝の子が宇都宮氏一族の八田氏に入る）が先祖。 八田氏は源頼朝の信任厚く、常陸国守護、東海道大将軍を任じられた。八田氏４代から小田氏を名乗り、小田に本拠を構えた。鎌倉末期、小田氏は守護職を失うが、中世を通じて勢力を保ち、室町時代には関東八屋形と呼ばれた。小田城は永禄末期から天正期に常陸北部の大名・佐竹氏や真壁氏等が攻略、最終的に佐竹氏の城となる。
拠点形成期間	治承３年（1179）・真壁氏成立（伝承） 慶長７年（1602）・秋田移転で廃城。	鎌倉時代・八田氏またはその子孫が構築。 慶長７年（1602）・佐竹氏秋田移転で廃城。

３）調査経過と全体概要

名称	真壁城跡	小田城跡
国指定	平成６年（1994）	昭和 10 年（1935）
城の形	東西 850m、南北 400m の規模。本丸、二の丸、中城、瀬戸（外曲輪）、北戸張などからなる求心構造の城郭。発掘は外周部の外曲輪から中城、二の丸へと進めている。	東西 500m、南北 600m 程の規模（指定地）。曲輪Ⅰ（本丸）は東西 130m、南北 145m。曲輪Ⅰを中心に、多数の曲輪が囲う。曲輪は信田郭、丹後屋敷など武士名称地名を残す。 発掘は曲輪Ⅰ（本丸）から外周部へ進む。
史跡整備の発掘	平成９年度開始。外曲輪、中城、二の丸等を発掘調査。	平成９年度開始。本丸を中心に周辺曲輪も発掘調査。
整備事業進捗状況	外曲輪の発掘、土塁整備等はほぼ完了。中城の発掘、整備を実施中。	本丸の発掘はほぼ完了。周辺調査中。 遺構復元やガイダンス施設の整備を実施中

以下は、基本的に真壁城跡の説明となります。小田城は後半の３．遺跡の特異性、４．まとめで示します（後述）。小田城の詳細はパンフレット（つくば市）をご参照ください。



小田城跡　（パンフレットより）

真壁城跡　（整備基本設計より）

国史跡・真壁城跡と城下町（重要伝統的建造物群保存地区）

１．検出遺構

付図１、２参照

（１）検出された建物跡（中城庭園関連のもの）

真壁城跡の中城中央部では、庭園周辺の調査を進めてきた。中世遺構は最終期の整地土や近世の土塁破壊土で覆われた部分が多く、中世遺構面（真壁城跡第Ⅲ面）はよく保存されている。

平成 17 年までに南部の苑池（南池）と周囲の建物跡群が出土（宇留野 2008、同 2009）。

平成 26、27 年度の調査で、さらに北部の苑池が出土（北池）。平成 28 年度は継続調査。

苑池と建物跡は、真壁城跡土器編年（宇留野 2009）の真壁城跡Ⅴ期（16 世紀第３四半期）からⅥ期（16 世紀第４四半期）。この間に苑池や建物配置は複数回改修されている。

柱間は、概ね６尺３寸間である。礎石建物１棟、掘立柱建物跡９棟がある。

掘立柱建物１（ＳＢ1880ｂ）東西５間、南北６間。南池西側棟。

茶室 1881ａ・ｂ、舞台状遺構ＳＸ1897、北池への起点。かわらけ廃棄土坑なし。

礎石建物２（ＳＢ1880ａ）　東西７間、南北８間。南池西側棟。中城で唯一の大型礎石建物跡。

耳皿（土器箸置）を多数伴うかわらけ廃棄土坑あり。耳皿の大量廃棄は中城初。

掘立柱建物３（ＳＢ1884）東西７間、南北５間。南池南側棟。かわらけ廃棄土坑２箇所あり。

掘立柱建物４（ＳＸ1897）東西３間、南北４間、斜行柱穴列５ｍ。南池上の西側。かわらけ廃棄土坑なし。ＳＢ1880ｂと接続。柱穴は細く仮設的。能舞台に類似。周囲は白砂含む整地土。

掘立柱建物５（ＳＢ1881ａ）　東西２間、南北１間の小建物。南池北側棟。かわらけ廃棄土坑あり。周囲から、茶壺、土風炉、大型火鉢、国産天目碗等が出土。茶室と推定。建物６、７も関連遺構と推定。建物７はかわらけ廃棄土坑なし。西側が砂敷き、白色礫の集中部分がある。これらの建物群へは、建物１から飛石列が延び、途中に塀があるなど露地の様相。

掘立柱建物跡８（建物 8～10 は調査中のため、建物番号のみ。所見も中間報告です。）

東西１間、南北２間。ただし、水路状の北池西側棟。この建物は柱間 1.5ｍ。周囲を溝で囲う。東側正面に真壁氏菩提寺のある天目山照明寺（現・伝正寺）、北池への砂利敷き南北道、飛石（跡）、門跡、水路状の池を望む。かわらけ廃棄土坑なし。天正期以降の小建物。露地の待合？

掘立柱建物跡９　東西２間、南北１間半。北池南側棟。北面する小建物。かわらけ廃棄土坑・溝あり。近接して壁土廃棄がある。周囲から天目碗等出土。永禄期～慶長期の茶室と推定。

掘立柱建物跡 10　東西１間半、南北２間。北池東側棟。西面する小建物。かわらけ廃棄土坑・溝あり。この建物は北池の東側を広く埋戻し、島状の地形をつくった後で構築。周囲から天目碗、茶壺、火鉢、土風炉等出土。天正期以降の茶室と推定。

（２）庭園の有無と特徴（真壁城跡）

庭園は本丸、中城で出土した（真壁城跡発掘調査会 1982、宇留野 2008、同 2009）。

中城は、北池、南池、水路状の池、露地、建物群があり、本丸南部では飛石が出土。

◆中城庭園の成立過程　居館から曲輪、曲輪の改造から庭園造成へ

庭園構築前の中城中央部は、もともと薬研堀による方形居館が構築されていた（真壁城跡Ⅲ期・15世紀末から16世紀前葉）。その痕跡は南池下面で出土しているほか、庭園南部の出入り口付近の浅い区画溝として出土している（ＳＤ842）。この付近に居館が営まれた痕跡である。

Ｖ期前半のⅢの堀（幅７～８ｍ）を一旦掘り、南が入り口の虎口をつくるが、すぐ埋め戻している。埋戻し後は、東に２０ｍ程堀を移し、Ｖ期後半のⅢの堀（幅15m程）をつくり、堀も曲輪も広く、虎口が東方向になるように改変したうえで、庭園をつくっている。

このことから、中城の庭園は当初の曲輪構造を大きく変更し、庭園敷地を広く確保した後、構築していることがわかった。幅7～８ｍの堀は城跡西側の堀の発掘や地籍図で確認でき、真壁城Ｖ期（永禄年間）当初の堀幅と考えられる。

◆中城庭園と基盤地形（段差のある池）

中城庭園の構造　北池、南池、水路状の池を中心に、大小の建物を配置。

北池は東西４６ｍ、南北１７ｍ、深さ0.3～0.5m。逆Ｌ字状の平面形態。中島、出島あり。

南池は東西２５ｍ、南北１４ｍ、深さ0.1～0.3m。方形に近い平面形態。中島、畦状遺構あり。

水路状の池は石組溝約30mに幅の狭い石組池が30mほどつく。北池と南池を結ぶ。

基盤地形　真壁城は全体に緩やかな傾斜地につくられている。そのため、平坦地を確保する目的で、テラス状の平場地形を造成する。中城庭園も傾斜地にあり、3段の平坦地を造成したうえで、上段に南池、中段に水路状の池、下段に北池をつくった。

段差が多い外曲輪を参考にすると、上段と下段の比高差は概ね0.3～0.5mで統一され、段差による敷地造成に一定の規格があったようである。多くの場合、段差下には溝がある。

中城庭園も段差下部に溝がある。溝の多くは近世以降の溝が重複して旧状は想定しにくいが、中世溝が両岸に残っている個所もあり、そこから推定すると幅１ｍ深さ 0.3m前後の溝となる。溝は苑池や土塁溝等と接続し、集水、配水の溝になったと思われる。

実際、降雨後の状況をみると、この段差下の溝が最も湧水が多い。ポンプ排水をしても池よりも湧水がわきやすい。

また、庭園に接する土塁は他所に比べて土塁内側の庭園に面する場所の屈曲、湾曲が多く、庭園造成にあわせた複雑な土塁形状となっている。

◆もう一つの庭園　中城庭園南端の茶庭（小建物：SX1536a、池：SX1536b、飛石 SX1575）

中城庭園中心部とやや離れた中城南部には、飛石４基を伴う小規模な庭園（南の茶庭）がある。「南の茶庭」と仮称したこのエリアは、建物跡は範囲確認のみだが、概ね東西４ｍ、南北６ｍ程の範囲に土壁片が出土した。土壁片集中の範囲は２間四方ほど。周囲から国産天目碗、土風炉等が出土しているため、茶室と推定している。池は西側にあり、景石らしき礫等を確認したが、全体像は不明である。池の位置から、建物は西に面する。

◆中城庭園の変遷

庭園の変遷は土器・陶磁器の年代と遺構の方位軸から推定している。

遺構の方位軸は、①南北軸が東へ 22 度傾く真壁城Ⅴ期（永禄年間）以前の軸、②ほぼ正方位に近い軸（天正年間）、③東へ 26 度傾くⅥ期の軸（天正から慶長年間）に分けられるが、これは城内の多くの発掘地点で確認できる（宇留野 2008ｂ）。

真壁城跡Ⅴ期（永禄年間）は、素掘りの北池、南池と小建物５、９、建物 11（SX1536a）からなる。中城中心部は池と小建物３棟の空間である。小建物付近は、茶道具（国産・中国産天目碗、土風炉、火鉢、茶壺等）や壁土が出土しており、飛石も数個所で出土した。このため、小建物は茶事に伴う茶室と推定する。いずれも４畳前後の規模である。これらの建物は、南面すれば筑波山、西面は日光連山、北面は加波山、足尾山、雨引山に面しており、山並みを借景として、苑池の水面にも映る。山並みを見ながら苑池を巡り、茶事、宴会等を行ったと思われる。

これらの施設は土器の年代から永禄年間には出現している。しかし、天正年間以降に千利休が大成した狭小で閉鎖性の強い茶室の系譜ではないと考える。足利義政の東山山荘に代表されるような、広大な景色を眺める開放性と、茶事の他に連歌、宴会など多様な接待の場としての「亭」「庵」（飛田 2006、谷 2013）に近いものと思われる。

真壁城跡Ⅵ期（天正～慶長７年）は、池の内部施設として中島、出島や畦状遺構を追加している。

南池周囲には建物１、２、３、４を追加し、北池・水路状の池付近では、建物８、10 を構築する。北池では中島と島状の溝を構築、改修し、このうちの真壁城Ⅵ期でも最終末と思われる中島上の溝から、かわらけの大量廃棄跡が出土している。

この時期の庭園は、中島等の内部施設を付加、充実させ、周囲には大規模建物、小規模建物が多く追加される。これは、苑池と小建物を中心とする庭園から、大小の建物群と組み合わせた多目的施設群となっており、露地の充実など、庭園機能に大きな変化がみられる。

◆池の護岸

池護岸は水路状の池が石組みを持ち、自然の川原石や割り石を利用している。

北池は砂敷きと玉石敷きの護岸で、景石跡らしき穴もある。南池は素掘りのままだが、真壁城の整地は粘質土に砂や黒色土を混ぜており、固く締まるうえに耐久性がよく、水がたまってもしみとおりにくく、壊れない。池底はあらためて粘土や石を敷いていない。

２．出土遺物（真壁城跡）

（１） 出土遺物の様相（数量など）

中城庭園付近は、概ね 16 世紀後半～17 世紀初頭の製品。威信財は平安末期から鎌倉時代。

中国産磁器　染付皿Ｂ１、Ｂ２、Ｃ、Ｅ、Ｆ群。染付碗Ｅ群。白磁皿Ｅ群。
白磁四耳壺、青磁盤、青磁酒海壺、青磁花瓶。

中国産天目茶碗　北池で３点ほど出土。城内希少品。

国産陶器　瀬戸美濃大窯 3～4、常滑、備前、唐津製品。天目茶碗、灰釉皿主体。

かわらけの割合　南池周囲の出土品は 80, 397 点を数え、9 割前後がかわらけ（宇留野 2009）。

かわらけの集中廃棄土坑の有無　かわらけの出土傾向で興味深いのは、かわらけの集中廃棄土坑を伴う建物２、３、５、９、10 と、伴わない建物１、４、７、８との違いが明確な点である。前者は酒宴や茶会を行う場所であり、後者がそれ以外の管理機能等を持った建物（饗宴準備施設、待機場所、楽屋など）であることを想定している。

（２）出土遺物の特徴（特殊遺物）

■耳皿の一括出土

礎石建物２（ＳＢ1880ａ）では、「耳皿」と呼ばれる箸置きのかわらけが多数出土した。

江戸時代の有職故実書『貞丈雑記』は「式正の膳」に用いる器として耳皿をあげており、儀礼色の強い土器である。城内では本丸に多い。耳皿の多い礎石建物２は庭園内部でも儀礼的な建物として、本丸に準ずる様相を示している。

３．遺跡の特異性　　付図２、３参照

（１）居館の内と外との相違（真壁城）

中城庭園と外曲輪　真壁城では、威信財とされる貿易陶磁器のうち、鎌倉時代以前の青磁・白磁は中城庭園付近が数量・種類とも多い。これらは本丸以外の他の地点は少ない。中城庭園の染付磁器は、多地点よりも碗、大型の皿が多い。

ただし、外曲輪北虎口付近は、なぜか青磁碗や青白磁梅瓶等の高級磁器が出土している。

北虎口は木樋が出土し、虎口西方には南北に長い蔵のような建物が並ぶ空間が出土している。

真壁氏の系図「当家大系図全」によれば、中城庭園改修時期の当主・真壁氏幹は、肥前名護屋在陣が終わる慶長３年（1598）に、「城の東樋口に閑居」したことが記されている。外曲輪北虎口付近は、蔵群が建ち並び、近くに隠居した当主居館があった可能性がある。

（２）真壁城と小田城

ここでは、両者の異同をみてみる。（小田城の調査は広瀬 2007、同 2010、小田城パンフを参照）

①　庭園の最盛期

小田城跡本丸庭園は、東池のある永禄年間前後が最盛期。天正以降、東池は廃絶し規模縮小。

真壁城跡中城庭園は、永禄年間に構築。最盛期は池・建物が揃う天正～慶長期。

②　永禄期　　庭園の特徴

小田城は、本丸内部を大溝で区画（南北 75m、東西 70mほど）。区画内は、東辺が塀か柵、南辺を土塁で囲う。本丸の内部にもう一つの内部居館のような区域がある。溝区画内は周囲より 0.3m高く造成。北は建物群の区画が小さく、壁土、炭化米が多く、倉庫や台所等の日常的区域、南側は礎石建物を中心に主殿などの非日常の区域（広瀬 2010）。溝区画内部は機能を細分する。

大溝の外は、南部が石敷きと庭園、東部は東虎口・北虎口への整然とした道路・空間となる。池は東池（東西 13m、南北 32m、深さ 0.3～0.8m、池底石敷、景石、築山）と西池（東西 17m、南北 14m、深さ１m、景石）がつくられ庭園の最盛期となる。

小田城の特徴は、北西部区画内の日常・非日常の空間、南部庭園部、東部・北東部の虎口といった機能区分が明確な点。一乗谷朝倉氏館のようなハレとケの空間配置が存在していると思われる。

一方、真壁城跡中城は庭園部と小建物群をめぐる導線からなり、区画は不明確で小田城と異なる。これは、足利義政の東山山荘にみる「亭」のような、緩やかな空間配置である。そもそも中城と小田城本丸は位置づけが異なるため、比較しにくいが、小田城との類似点は、２つの池を並立させる点、方形の池（西池）、護岸石組みがほとんどない池（東池）があげられる。

小田城跡の威信財となる輸入陶磁器は、真壁城跡ではみられない中国産の五彩壺、大型青磁盤、ベトナム産青花玉壺春瓶など、県内全域でも希少なものが多数出土している。このことをみても常陸の名族の城館であることを示している。

③　天正期～慶長７年　　佐竹氏支配下、肥前名護屋出陣の影響による城郭・庭園の機能

佐竹氏の影響力が強まった天正年間以降の真壁城と小田城の庭園を比較すると、小田城では東池を埋め、西池を縮小し、馬出を充実するのに対し、真壁城では庭園の改修を重ね、中島、飛石、露地（園路）、大規模建物、舞台状遺構、茶室等を加え、安土桃山時代庭園として充実を図る。

真壁城庭園の改修は最末期まで行われた。この充実は、当主・真壁氏幹が文禄・慶長の役（1592～慶長３年・1598）に出陣し、豊臣政権や大名陣屋の庭園文化に影響を受けた可能性を想定している。

また、佐竹氏の常陸国全体の領国経営として考えた場合、小田城は軍事施設の比重が増え、真壁城は佐竹領国下における、県南・県西地域の儀礼・饗宴空間として、機能拡充が求められたと思われる。

佐竹氏の関与する２つの城郭は、各々の機能分担が図られたのではないだろうか。

４．まとめ

（１）居館整備、作庭の契機と画期　参考史料

ⅰ）弘治３年（1557）の連歌興行　時宗藤沢山清浄光寺・第 29 世体光上人の連歌集『石苔』に遊行先・真壁久幹（道無）の興行連歌「引きのこす秋風いく世あしほ（足尾）山」

ⅱ）永禄年間の求心構造城郭整備　①真壁城Ⅴ期前半の堀（幅 7～８ｍ）構築と埋戻し
②真壁城Ⅴ期後半の堀（幅１５ｍ前後の堀）構築
城下は上宿・下宿・見目等基幹道付近を整備。

ⅲ）永禄７年（1564）　佐竹氏の真壁普請記事「真壁・笠間・行方普請被成候」「烟田旧記（抄）」、上杉氏の常陸小田城攻め

ⅳ）天正末～慶長初期　連歌師・猪苗代兼如「真壁闇礫軒追善連歌」（『続群書類従』

ⅴ）天正 19 年（1591）「佐竹義宣書状」（真壁文書 96）の「真壁普請申付」記事

ⅵ）文禄２年（1593）真壁氏幹、肥前名護屋出陣（佐竹氏家臣日記『大和田近江重清日記』）

（２）今後の調査・整備の方向性

真壁城　中城庭園の調査継続。中城復元整備を計画（整備基本設計策定）。

小田城　本丸整備後の史跡・ガイダンス施設公開。周辺曲輪の調査。

（３）課題と展望など

真壁城跡は、本丸が昭和 50 年代に調査されたが（1982）、中心域の特徴が把握できていない。そのため、城内の階層性や上限年代、古期施設などが把握しきれていない。城下部分もほぼ未発掘で課題である。

小田城跡は、関連地域の発掘が県教育財団等で広く進められており、膨大な基礎資料が蓄積されている。今後それら周辺資料との比較、考察を行えば、城下や小田氏領域の拠点景観の特徴、地域構造が明らかになると思われる。

＜参考文献＞

茨城県立歴史館 2005『戦国大名　常陸佐竹氏』展示図録

市村高男 2013「中世宇都宮氏の成立と展開」『中世宇都宮氏の世界』彩流社

宇留野主税 2008ａ『史跡真壁城跡Ｖ』桜川市教育委員会

宇留野主税 2008ｂ「戦国期真壁城と城下町の景観」『茨城県史研究』92 号茨城県立歴史館

宇留野主税 2008ｃ「史跡真壁城跡の中城庭園遺構について」『日本庭園学会誌』№19 号　日本庭園学会

宇留野主税 2009『史跡真壁城跡Ⅵ』桜川市教育委員会

宇留野主税 2010「史跡真壁城跡の中城庭園遺構について２」『日本庭園学会全国大会公開シンポジュウム　文化財庭園の発掘と保存整備　資料集』日本庭園学会

小野正敏 2004「中世武士の館、その建物系譜と景観」『考古学と中世史研究１中世の系譜　東と西、北と南の世界』

齋藤慎一 1994「本拠の景観　十四・十五世紀の常陸国真壁氏と亀熊郷」『中世の風景を読む』2　新人物往来社

佐賀県立名護屋城博物館 2005『秀吉と城』展示図録

佐賀県立名護屋城博物館 2014『肥前名護屋城と「天下人」秀吉の城』展示図録

桜川市教育委員会 2014『平成 26 年度　史跡真壁城跡発掘調査現地説明会資料』

桜川市教育委員会 2015『平成 27 年度　史跡真壁城跡発掘調査現地説明会資料』

谷　晃 2013「珠光から紹鴎へ」『講座日本茶の湯全史　第一巻中世』茶の湯文化学会

飛田範夫 2006『庭園の中世史　足利義政と東山山荘』吉川弘文館

広瀬季一郎 2007「中世小田の歴史的景観」『中世東国の内海世界』高志書院

広瀬季一郎 2010「史跡小田城東池跡の発掘成果と復元」『日本庭園学会全国大会公開シンポジュウム　文化財庭園の発掘と保存整備資料集』日本庭園学会

真壁城跡発掘調査会 1982『真壁城―中世真壁の生活を探る―』

宮崎博司 2015「肥前名護屋の庭園関連遺構について」『研究紀要』第 21 集　佐賀県立名護屋城博物館

＜お問い合わせ＞　〒300-4408　茨城県桜川市真壁町真壁１９８　真壁伝承館

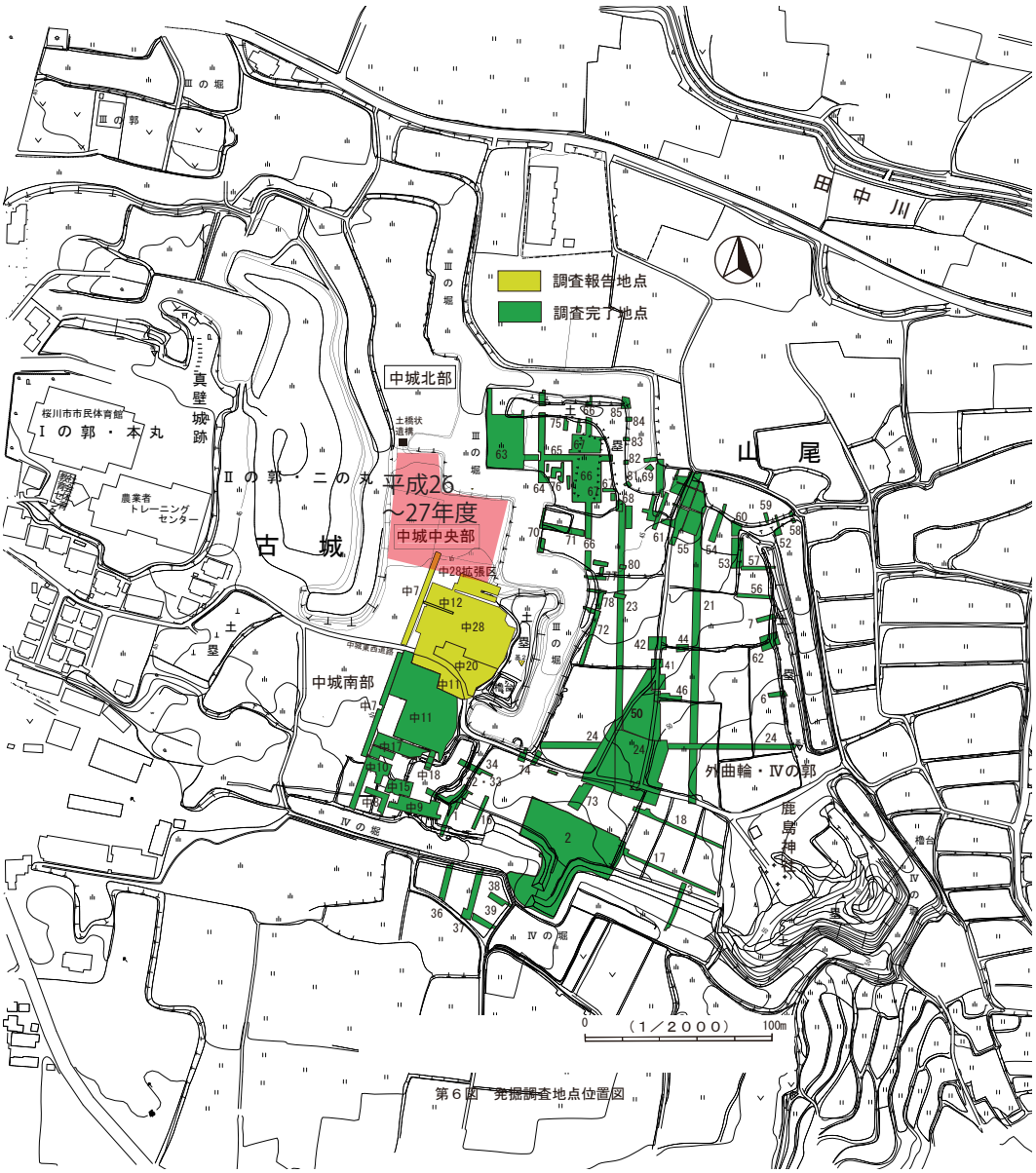
桜川市教育委員会　生涯学習課　宇留野主税（うるの　ちから）

c-uruno@city.sakuragawa.lg.jp

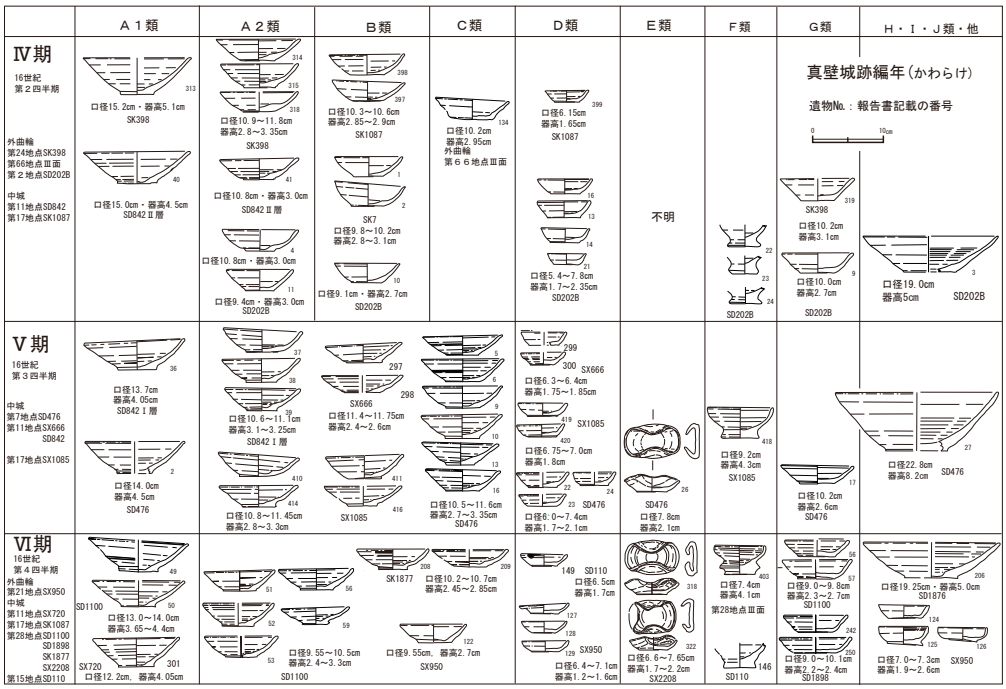
付表　真壁城と真壁氏関連略年表

西暦	和暦		事項	文献
1179	治承	3	平長幹，真壁郡司として入部するという	
1189	文治	5	真壁長幹，八田知家に属し源頼朝の奥州合戦に従軍	吾妻鏡
1192	建久	3	鎌倉幕府成立	
1229	寛喜	1	真壁時幹，真壁郡内十四ヶ郷の地頭職を得る	真壁文書
1269	文永	6	真壁時幹，真壁郡内十ヶ郷の地頭職を子息盛時に譲る	真壁文書
1299	正安	1	真壁盛時，真壁郡内八ヶ郷の地頭職を孫幹重に譲る	真壁文書
1303	乾元	2	鎌倉幕府，真壁幹重の所領相伝の正当性を裁許	真壁文書
1306	嘉元	4	真壁郡の田数が四一七町余と算定される	常陸国太田文
1337	延元	2	佐竹貞義，常陸守護となる	
1338		3	室町幕府成立	
1342	興国	3	北畠親房，真壁城周辺の戦況を結城親朝に報じる	相楽結城文書
1344	康永	3	将軍足利尊氏，真壁郡内九ヶ郷の地頭職を真壁高幹に安堵 真壁幹重，常陸国内の戦況を結城親朝に報ずる	真壁文書 白河結城文書
1347	貞和	3	陸奥国蜷河庄地頭真壁政幹代官薄国幹，北朝方に立ち軍忠を重ねる	真壁文書
1401	応永	8	将軍足利義満，真壁郡内九ヶ郷の地頭職を真壁顕幹に安堵	真壁文書
1409		16	真壁顕幹，郡内所領を嫡子秀幹等に譲る	真壁文書
1423		30	将軍足利義持，真壁郡内八ヶ郷を真壁秀幹に安堵 宍戸満里，真壁城を攻める	真壁文書 一木文書
1439	永享	11	真壁朝幹，真壁氏遺跡の正当的継承を主張	真壁文書
1456	享徳	5	古河公方足利成氏，真壁郡内九ヶ郷等を真壁朝幹に安堵	真壁文書
			真壁兵部大輔，要害を構え古河公方足利成氏に敵対	「武家事紀」所収文書
1461	長禄	5	真壁朝幹，置文・譲状を以て家の経営を指示，所領配分	真壁文書
1496	明応	5	真壁氏，小田政治より小田家内紛時の援助を求められる	真壁文書
1541	天文	10	真壁家幹，雨引山楽法寺に大般若経を寄進	楽法寺蔵大般若経奥書
1560	永禄	3	真壁氏が長尾景虎に太刀を献じる	上杉家文書
1561		4	真壁九郎，佐竹義昭より義の一字を受け義幹と称す	真壁文書
1569		12	真壁義幹，佐竹方として北之郡で小田氏治と対戦 真壁氏被官江木戸氏，佐竹義重より軍功を賞される	真壁文書 榎戸文書
1573	元亀	4	真壁久幹，小田氏治より三ヶ条の起請を受ける	真壁文書
1582	天正	10	真壁氏幹，佐竹義重の指揮下に入ることを約する 本能寺の変	千秋文庫所蔵文書
1586		14	真壁久幹，佐竹義斯より二ヶ条の起請を受ける	真壁文書
1590		18	真壁氏幹，小田原在城の豊臣秀吉に太刀・馬・金を献じる	佐竹文書
		20	真壁氏幹，被官江木戸氏の肥前名護屋出兵を賞す	榎戸文書
1595	文禄	4	佐竹義宣，豊臣秀吉より54万石余の知行を宛がわれる 真壁義幹，佐竹義宣より2017石余の知行を宛がわれる 真壁氏幹，被官江木戸氏・大関氏等に知行を宛行う	真壁文書 榎戸文書・大関文書
1596		5	真壁氏，真壁領中の佐竹義宣蔵入地を預かる	秋田県公文書館所蔵文書
1597	慶長	2	佐竹義宣，真壁郡内九ヶ村の麦田の検地を実施	秋田県公文書館所蔵文書
		4	真壁房幹，雨引山楽法寺へ本木村で300石の地を寄進	楽法寺文書
1600		5	関ヶ原の合戦	
1602		7	佐竹義宣，出羽国移封 真壁房幹，重幹兄弟，佐竹氏に随伴して出羽国移住	当家大系図
1603		8	江戸幕府成立	
1606		11	浅野長政，真壁・筑波両郡内に５万石で入封	寛政重修諸家譜
1607		12	真壁藩検地（慶長16年まで）	「真壁町史料」近世Ⅰ
1611		16	浅野長政死去，長重跡を継ぐ	
1622	元和	8	浅野長重，笠間へ移封	

付図１　真壁城の発掘調査区と土器編年(宇留野2009より)



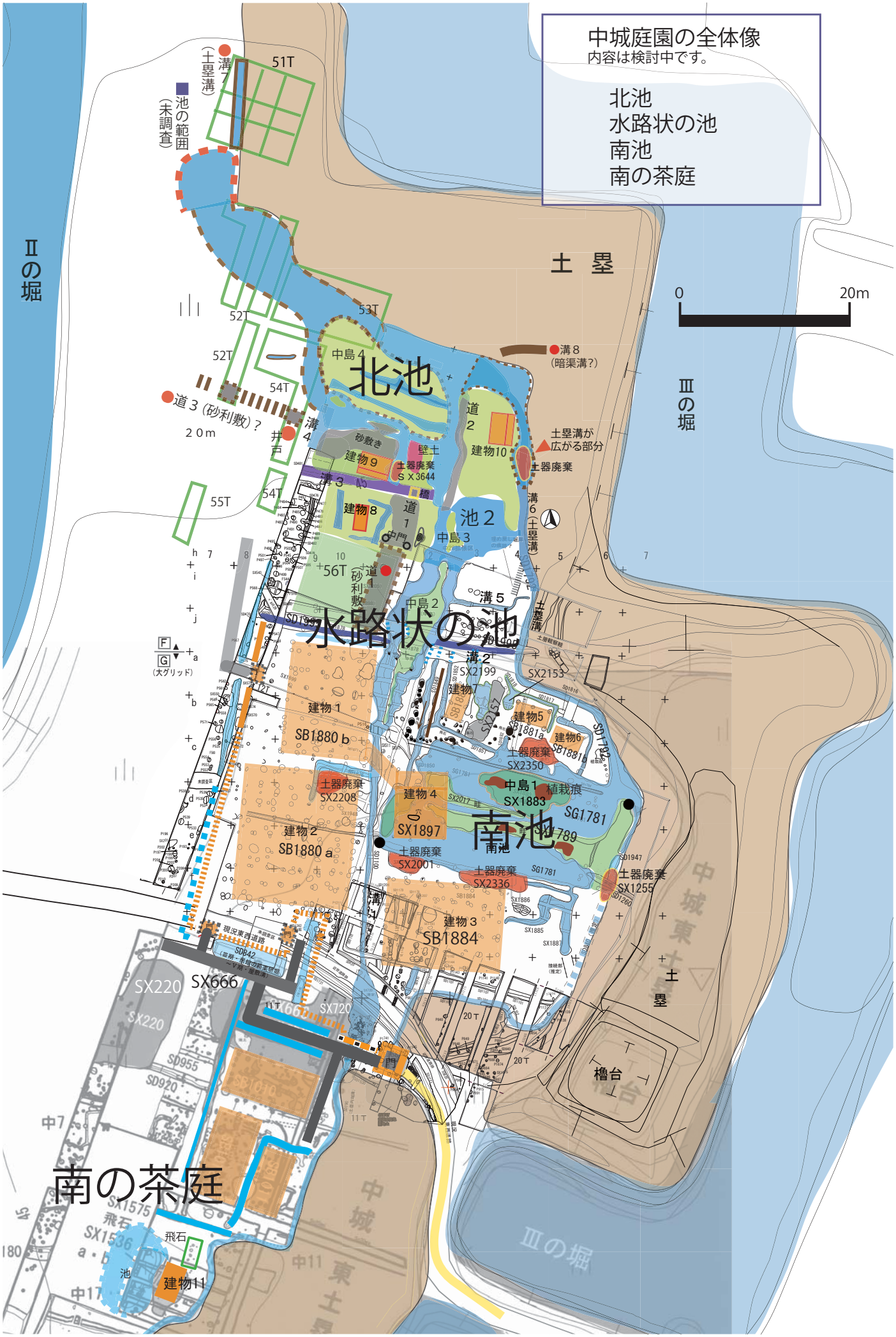
第６図　発掘調査地点位置図



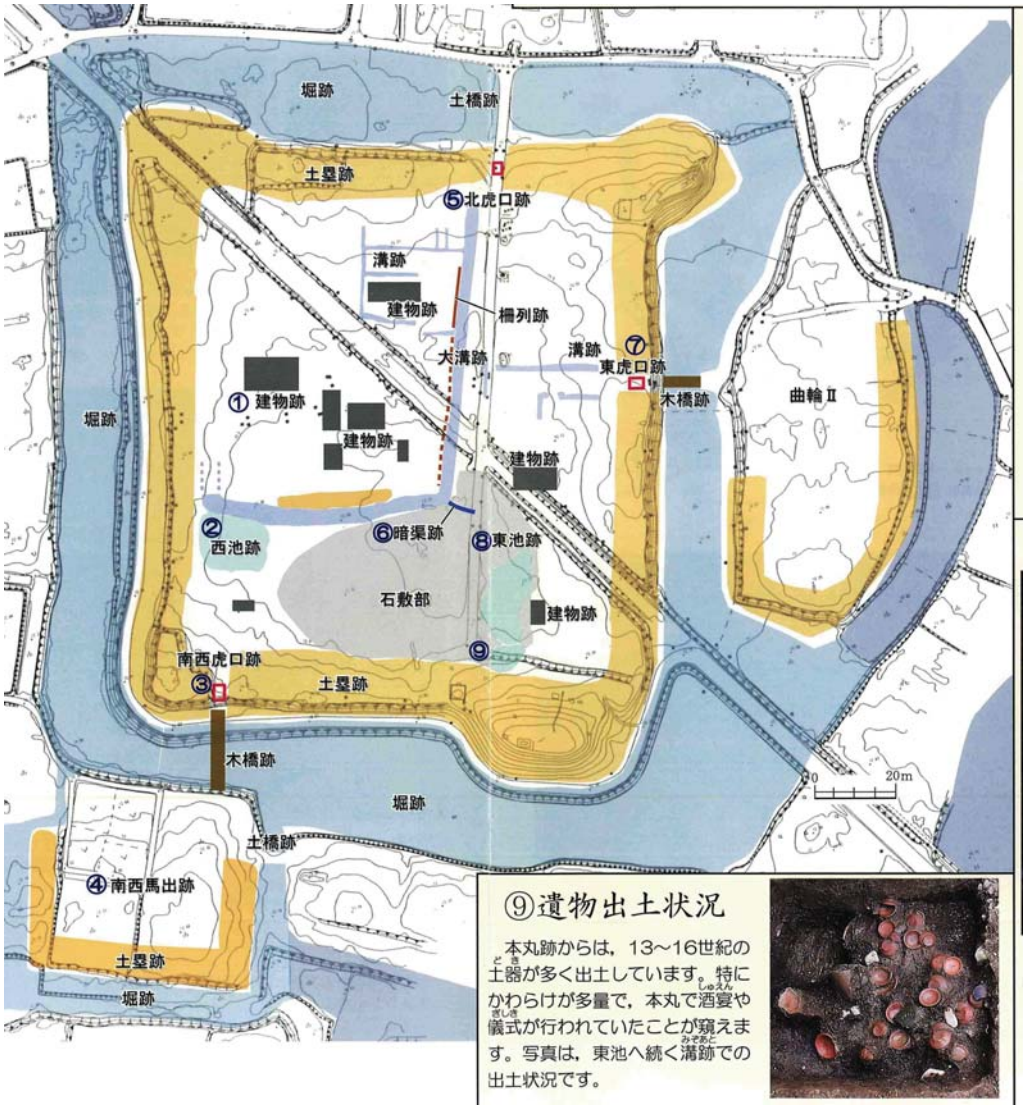
第４２図　真壁城跡出土遺物の編年（２）

史跡真壁城跡　土器編年（宇留野2009）

付図2　真壁城跡の中城庭園

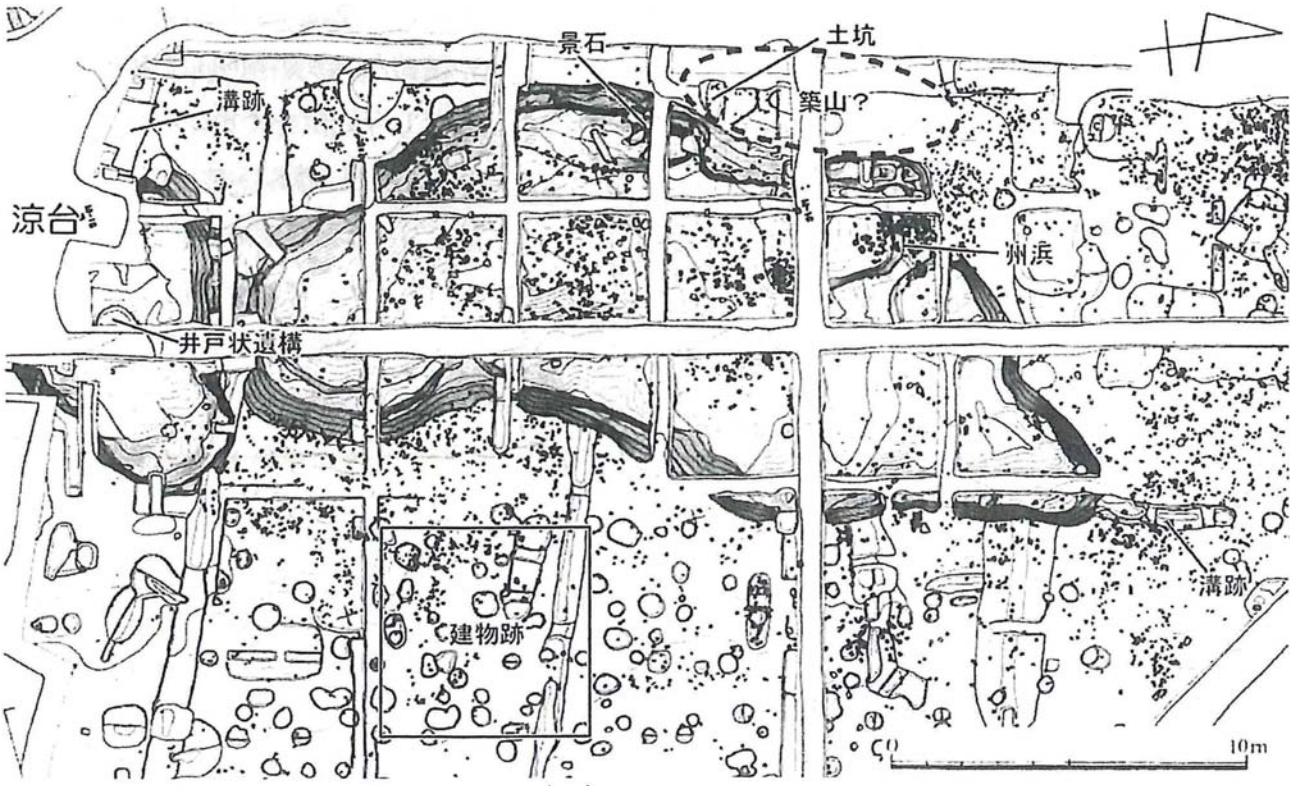


付図３　小田城跡曲輪Ⅰ（本丸）の変遷と庭園



本丸の遺構配置（パンフレットより）

本丸の変遷



本丸東池　遺構平面図（広瀬2010より）

小田原城の調査成果

佐々木　健策（小田原市文化財課）

はじめに

（1）立地と環境

小田原城は、箱根古期外輪山から足柄平野に向かって延びる丘陵先端部に位置し、南西に早川、北東に山王川・酒匂川が流れ、南は相模湾に面しています。

その城域は、西端の小峯御鐘ノ台（標高 123.8m）を頂点として派生する三本の尾根（北から谷津丘陵、八幡山丘陵、天神山丘陵）と、相模湾に面した標高 10m前後の沖積地からなっており、中央に位置する八幡山丘陵の先端部に近世の本丸が位置しています。そして、近世本丸とそれを取り囲む二の丸及び諸曲輪の大半（御用米曲輪・雷曲輪・鷹部屋（南）曲輪・馬屋曲輪・御茶壷曲輪）が、現在小田原城址公園となっています（図1）。小田原城址公園のほぼ全域が国指定史跡であり、ここで紹介する御用米曲輪も昭和 34 年（1959）の第二次指定により国指定史跡となりました。

「御用米曲輪」との曲輪名は、江戸幕府の蔵が置かれていたことによります。慶長 19 年（1614）以降の姿を描いたとされる通称「加藤図」にも、御用米曲輪の場所に蔵と思しき建物が描かれており（図2）、正保年間（1644～1648）に描かれたとされる絵図（通称「正保図」）には、「百間蔵」と記されていることから（図3）、近世初頭より蔵が所在する場であったことがわかります。

そして、さらに遡った戦国期の御用米曲輪については、天正 16 年（1588）7月 13 日付けの虎朱印状に「三間梁百間之御蔵材木煤谷へ申付分」とあることから、通称「正保図」に記された「百間蔵」の系譜は戦国期まで遡るものと考えられています（田代 1995）。

（2）小田原城の歴史概略

小田原は、伊勢宗瑞に始まる戦国大名小田原北条氏の本拠地として知られています。伊勢宗瑞は、文亀元年（1501）までに小田原へ進出し、二代目氏綱以降本拠地としての整備が進められました。そして天正 18 年（1590）の小田原合戦に至るまでの約 100 年、関東の首府でありました。

その後、江戸時代に入ると江戸の西を守る要として位置づけられ、大久保氏・阿部氏・稲葉氏・大久保氏と、代々譜代大名が城主を歴任し、城下は東海道の屈指の宿場町としても繁栄しました。

小田原城は明治維新を迎えると、明治6年（1873）の廃城令を待たずに主要建物が解体され、明治 34 年からは御用邸として用いられます（図4）。そして、大正 12 年（1923）に関東大震災による大きな被害を受けると、震災復興事業の中で二の丸堀の埋め立てが計画されます。これを契機として小田原城跡の保存運動が活発となり、昭和 13 年（1938）に国指定史跡となりました。

その後、昭和 35 年に天守閣が復興し、昭和 45 年には常盤木門が再建され、昭和 57 年からは本格的な発掘調査を伴う史跡整備に着手することになりました。これまでに馬出門から馬屋曲輪、銅門、常盤木門を経て本丸へと至る大手登城ルートの整備が進められ、平成 22 年（2010）度から御用米曲輪の整備事業に着手しています（図1）。

（3）調査の経過と概要

御用米曲輪は関東大震災を経て神奈川県有地となり、昭和 24 年（1949）には野球場が造られ、昭和 57 年に野球場が廃止されてからもイベント広場や駐車場として用いられていました。しかし、平

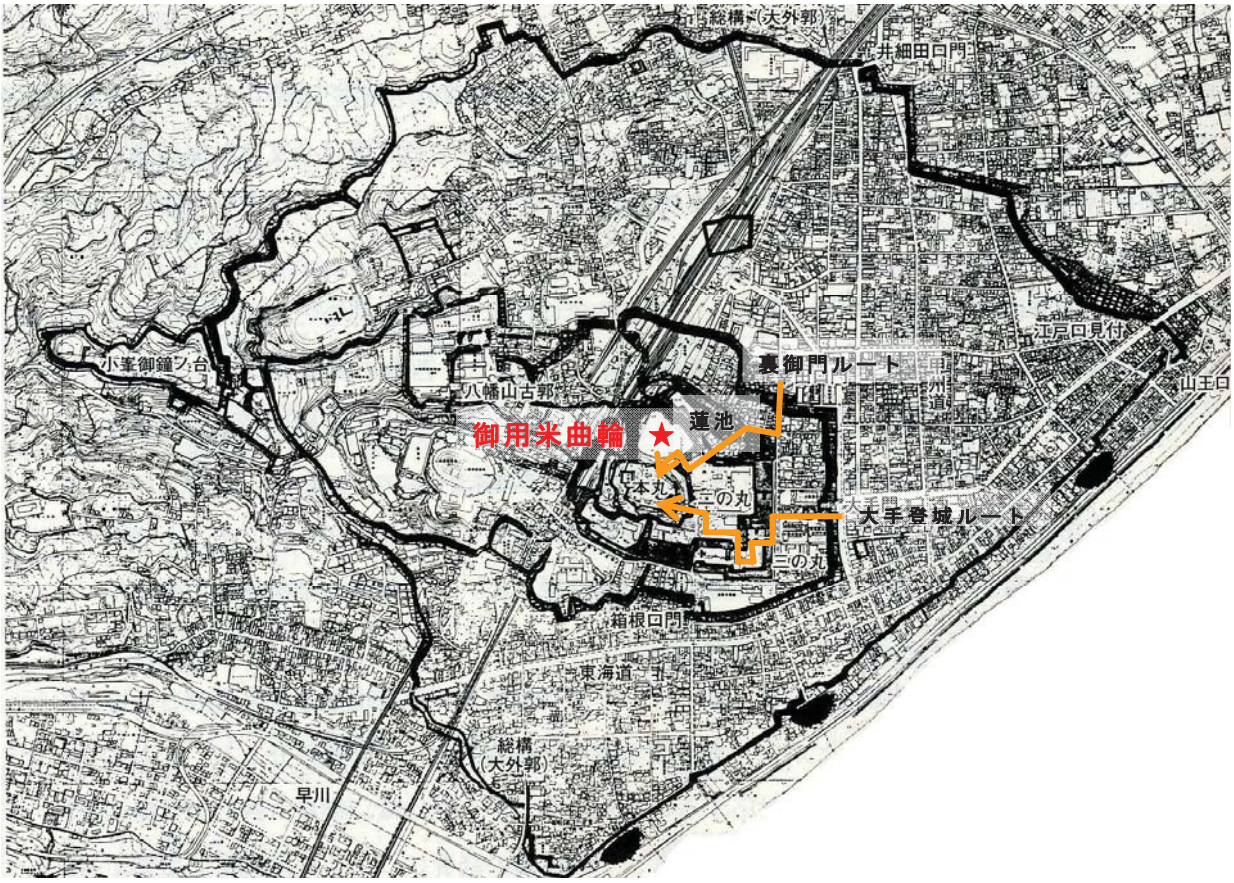


図１　小田原城城域図と御用米曲輪の位置

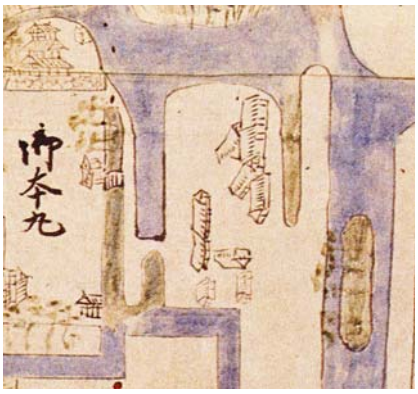


図２　通称「加藤図」（1614 頃）

図３　通称「正保図」（1650 頃）

図４　「御用邸總図」（1910 頃）

成 22 年（2010）度に文化庁の指導があり、平成 23 年度より史跡整備に着手することとなりました。

約 24,000 ㎡の御用米曲輪全体が整備対象となっており、平成 26 年度までの5年間、約 10,826 ㎡発掘調査を実施しました。当初は近世小田原城の曲輪取りを明確にすること、御用米曲輪に所在した近世の蔵跡の所在を明らかにすることを目的に調査を行い、6棟の蔵跡や「瓦積塀」を伴う建物の跡などを確認することができました。また、徳川将軍家の家紋である三ツ葉葵紋の軒丸瓦が多く出土するなど、江戸時代の御用米曲輪の様相を探るうえで重要な調査成果が得られています。

そして、近世遺構を検出した面の下から、戦国期の遺構・遺物が発見されました。検出した遺構は、一部に 16 世紀前半のものを含むものの、天正 10 年代（1582～1590）を中心とした 16 世紀後半のものと考えられ、その数は 1,000 基を超えます。

ここでは御用米曲輪の調査で明らかとなった戦国期代の小田原城の姿について紹介します。

1. 検出した戦国期の遺構

(1)建物跡

御用米曲輪の調査成果ついては、今年度概要報告書を作成し、16 棟の礎石建物と 14 棟の掘立柱建物跡の存在が想定できました。遺構面は少なくとも7面存在し、第3～7面が戦国期の遺構面に相当します。中世最終面(第3面)には、寛永地震(寛永 10 年:1633)の影響を受けた地割れ・地滑り等の痕跡があり、その上には寛永 10 年より始まる小田原藩主稲葉正勝による小田原城近世化工事に伴う盛土造成の痕跡が確認できます。このことから、御用米曲輪戦国遺構面の下限は寛永 10 年と位置づけられることがわかります。

戦国期の建物跡と想定されるものは、上記建物群のうち、礎石建物 16 棟、掘立柱建物8棟です。柱間一間の寸法は、6尺2寸5分(189.37 ㎝)を中心に、4尺7寸(142.41 ㎝、6尺2寸5分の3／4)や6尺(181.8 ㎝)のものなどがあります。後述しますが、現時点では6尺2寸5分の建物から6尺の建物へと推移し、近世御用米蔵の段階には柱間6尺5寸(196.9 ㎝)となったと考えています。6尺5寸は、稲葉氏による小田原城近世化工事以降の小田原城全体に共通する寸尺です。

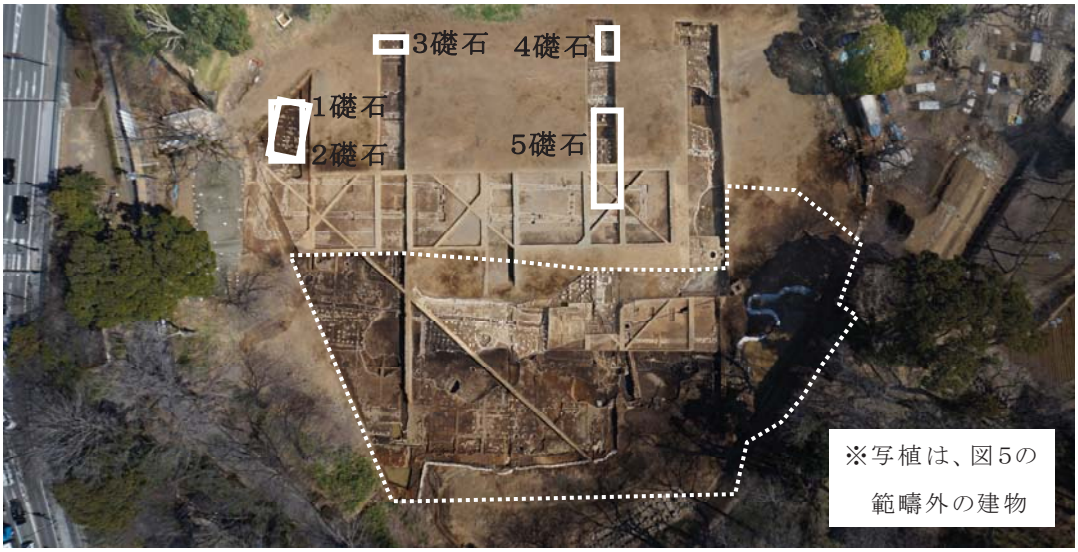


写真１　御用米曲輪調査範囲空撮合成写真（南西から、白点線の範囲が図５の範囲）

図５　御用米曲輪（南側部分）検出の全戦国期遺構概略図

以下で、第３～７面の遺構を３期に分け、建物を中心に説明します。

第３・４面：戦国期の最終段階であり、廃絶は寛永 10 年（1633）。

- ・1号礎石建物　：5間（1間＝6尺2寸5分×2・6尺×2・6尺2寸5分）×3間（6尺2寸5分×3）、52 度
- ・5号礎石建物　：7間（6尺×7）×2間（4尺7寸×2）、44 度
- ・11 号掘立柱建物：6間（6尺×6）×3間（4尺7寸・6尺・4尺7寸）、42 度
- ・12 号掘立柱建物：1間（4尺7寸）×半間（6尺2寸5分の半間）、42 度
- ・6号礎石建物　：10 間（6尺2寸5分×3・8尺2寸5分・6尺2寸5分×6）×4間（4尺7寸×4）、44 度
- ・7号礎石建物　：10 間（6尺2寸5分×3・8尺2寸5分・6尺2寸5分×6）×4間（4尺7寸×4）、44 度
- ・8号礎石建物　：1間以上（6尺2寸5分×？）×5間（4尺7寸×5）、44 度
- ・9号礎石建物　：1間以上（6尺2寸5分×？）×1間以上（4尺7寸×？）、44 度
- ・10 号礎石建物：4間（6尺2寸5分×4）×3間以上（6尺2寸5分×3）、44 度
- ・11 号礎石建物：不詳、44 度
- ・7号掘立柱建物：4間（6尺2寸5分×4）×2間（10 尺・4尺7寸）、54 度
- ・8号掘立柱建物：2間（6尺2寸5分×2）×4間（4尺7寸×4）、48 度

◎第3面は砂利面・硬化面上に展開し、第4面はその下に展開する遺構。

◎1・5号礎石、11 号掘立柱建物は、1間6尺の柱間を含み、後出と評価される。

◎6～10 号礎石建物は、長大な建物であり、総柱の礎石建物であることから、蔵の可能性が想定される。

◎5号礎石建物も、6～9号礎石建物と同様に蔵の可能性があるが、増築分か。

◎4尺7寸は、6尺2寸5分の3／4に相当する。

◎桁6尺2寸5分・梁4尺7寸とする建物群には、方位軸を含めて共通性がみえる。

◎8号掘立柱建物は、外周に布基礎状の溝を持つ建物である。

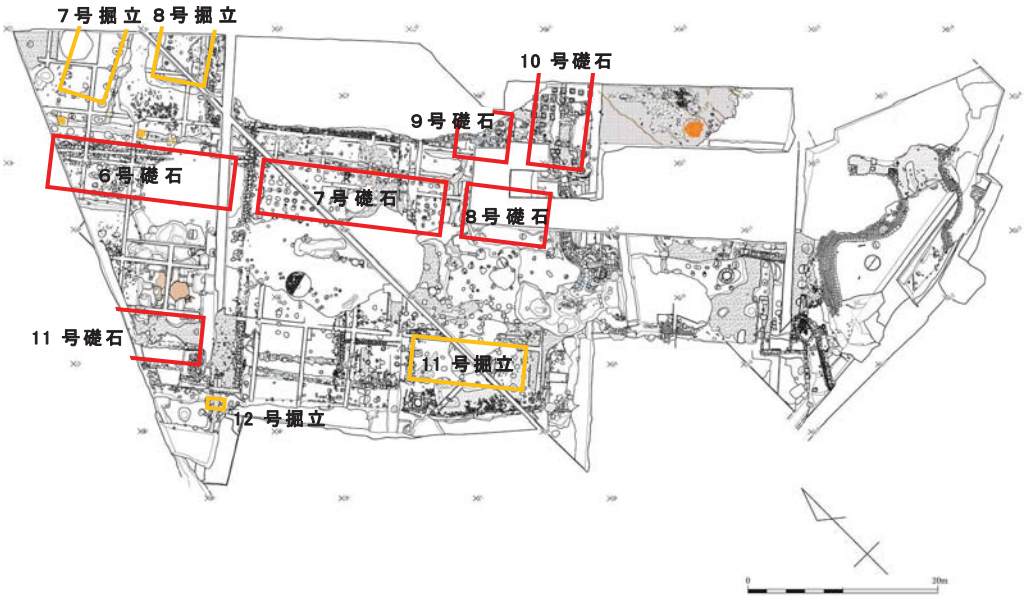


図６　御用米曲輪（南側）検出の戦国期遺構概略図（３・４面）Ｓ＝1/800

第5・6面：最も濃密に建物が分布し、池・広場・切石敷などの庭園を伴う。

- ・2号礎石建物　：不明×3間（6尺2寸5分×3）、42 度
- ・3号礎石建物　：2間以上（6尺2寸5分×2）×2間以上（4尺7寸×？）、42 度
- ・4号礎石建物　：2間以上（6尺2寸5分×2）×3間以上（4尺7寸・4尺・4尺7寸）、42 度
- ・9号掘立柱建物：4間（6尺2寸5分×4）×2間（6尺2寸5分×2）、42 度
- ・10 号掘立柱建物：1間（7尺7寸5分）×1間（6尺2寸5分）、42 度

- ・12 号礎石建物：3間（6尺2寸5分×3）×6間（6尺2寸5分×2・6尺・6尺2寸5分×3）、44 度
- ・13 号礎石建物：6間（4尺7寸×6）×4間（4尺7寸×3・6尺2寸5分）、44 度

- ・14 号礎石建物：8間（6尺2寸5分×3・7尺2寸・6尺2寸5分×4）×7間（4尺7寸・6尺2寸5分×5・4尺7寸）、48 度
- ・15 号礎石建物：2間（4尺7寸×2）×2間（4尺7寸・6尺2寸5分）、48 度
- ・16 号礎石建物：6間（6尺2寸5分×6）×4間半（6尺2寸5分×3.5・4尺7寸）、48 度

◎第4面を形成する堆積土の下にある砂利面上に展開し、大きな変遷が1度ある。

◎2号礎石建物は1号礎石建物の下位にあり、詳細不明。

◎真北から東に 48 度傾く軸線の建物が先行し、その後 44・42 度傾く建物が建つ。

◎9号掘立柱建物は、「茶室」「泉殿」「釣殿」などではないかとの説がある。

◎10 号掘立柱建物は、9号掘立柱建物に付随する井戸の覆屋で、7尺7寸5分は6尺2寸5分の5／4に相当（後述する 14 号掘立柱建物にもあり）。

◎14 号礎石建物は御用米曲輪最大の建物であり、「会所」の可能性が指摘される。

◎15 号礎石建物は切石敷井戸と切石敷の排水施設を伴い、「湯屋」と指摘される。

◎16 号礎石建物廃絶後、ほぼ同じ位置に 11 号掘立柱建物が建てられている。

◎1・2号池の改変を伴う変遷が想定できる。

図７　御用米曲輪（南側）検出の戦国期遺構概略図（５・６面）Ｓ＝1/800

第７面：第5・6面の遺構に切られ、土坑などの底面で確認できた最下位の遺構

・13 号掘立柱建物：5間（6尺2寸5分×5）×2間（6尺2寸5分×2）、44 度

・14 号掘立柱建物：2間（7尺7寸5分×2）×1間（6尺2寸5分）、48 度

◎13 号掘立柱建物は、ピットの底に根石を据えた建物。

◎検出状況から最下面とした遺構というだけであり、上面に付随する可能性もある。

◎未調査の遺構が他にも存在するものと思われる。

◎南端部で検出されている障子堀は、後に浅く改変されて1号池への導水路となるが、この時期には堀を渡る橋が架かっていた可能性がある。

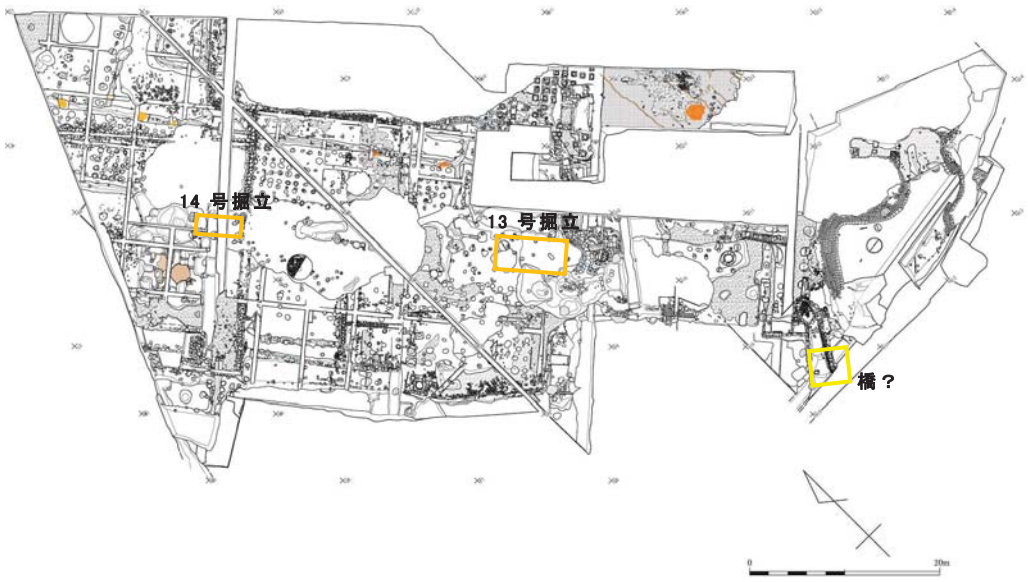


図８　御用米曲輪（南側）検出の戦国期遺構概略図（７面）Ｓ＝1/800

（2）庭園の特徴

御用米曲輪で庭園と位置づけ得る遺構には、2つの池を中心とした空間、砂利面・硬化面による空閑地、切石を敷き詰めた空間の3種類があります。東側より、池・空閑地・切石敷庭園・空閑地の順に位置しています。前節で述べた建物群の大半は切石敷庭園を伴う空間と池畔にあります。

池は上下の位置関係で 2 基存在しています。上段の池は 8.5 ㎡程度の小規模なものであり（1号池）、下段の池は検出範囲だけでも約 190 ㎡を測ります（2号池）。

1号池は、箱根安山岩製の石塔（五輪塔・宝篋印塔・宝塔）の四角い部位や「風祭石」と呼称する黒色の箱根凝灰岩、「鎌倉石」と呼称する黄色の三浦半島の凝灰質砂岩を用いて作られており、中央は楕円形に一段下げて円礫と砂利を敷き詰めています。側面には、「根府川石」と呼ばれる板状節理する箱根安山岩の板石が用いられ、要所には安山岩や「風祭石」の巨石を配置しています（写真2）。南側の背面には、「風祭石」の切石で擁壁が構築され、戦国期に存在した斜面の裾を抑える役割を果たしていました。そして、斜面からの水を切石組遺構で受け、1号池へと導水しています。1号池をオーバーフローした水は滝のように 2 号池へと落ちる構造になっています（写真2）。

2 号池は、東側が調査区外へと広がり、近世の城道の下へと潜りますが、外周は少なくとも 100m 近い規模になると考えられます。構築時には最大で約 200 ㎝の深さがあり、護岸には箱根安山岩製の石塔（五輪塔・宝篋印塔・宝塔）部材が二次加工を加えられて用いられています。近世以降に攪乱され、崩落していた石材 372 点のほぼ全てが石塔部材であったことを考えると、護岸として残る石材も石塔部材であろうと想定され、その数は 1,200 点を超えます（写真3）。なお、2 号池の池底では粘土などを貼り付けた痕跡は確認できていませんが、ピットが 2 基、土坑が2基確認されています。

そして、池の西側には9号掘立柱建物が位置しています（写真2・3）。この建物の裏手には石組井戸があり、砂利が敷かれた空間が広がっています。井戸の脇からは、建物の下を潜って2号池へとつながる暗渠水路も存在し、これらは一連の空間を構成した遺構と考えられます（図7）。

そして、さらに西側には、切石を用いた空間が広がっています（図7、写真4・5）。残念ながら中央を大きく攪乱されていましたが、それぞれ南側法面を背景にした庭園であろうと考えられます。

3号切石敷遺構は、黄色（鎌倉石）と黒色（風祭石）の凝灰岩を幾何学的に切り出し、モザイク状に組み合わせたものを敷き詰めたものです。要所に安山岩の巨石を配置して景色を作っています。1・2号池や2号切石敷遺構のような石塔の転用は少なく、切石は凝灰岩の柔らかさを利用した立体的な加工が施されています。また、検出時に倒れていた巨石は、抜き穴の存在から立っていたことが明らかとなり、碑面は梵字等が刻まれていたものを丁寧に削り取っている状態でした（写真6）。

この遺構は、14 号礎石建物に接しており（図7）、同建物に付随する庭園だと考えられます。

写真2　1号池

写真3　2号池

写真4　2号切石敷遺構

写真5　3号切石敷遺構

写真6　切石敷遺構に伴う立石

2. 出土遺物について

(1)出土遺物の様相の特徴

出土遺物については、全ての整理作業が済んでいないため明確にはできませんが、南側の調査区出土遺物 9,836 点中、9,625 点がかわらけであり(陶磁器は 312 点)、この他にも未整理のかわらけ廃棄土坑が多数存在することから、出土遺物の 98%近くがかわらけであることは確実です。重さでは、完形のかわらけ1点が約 10gですので、3,757 点のかわらけがあったことなります。

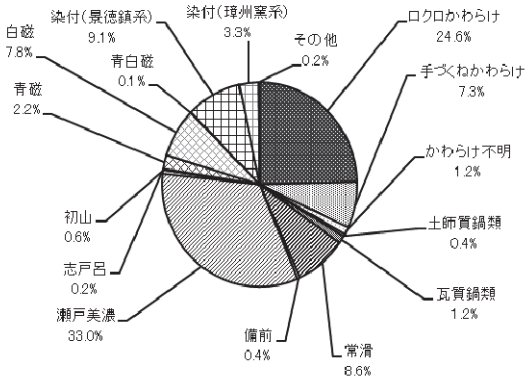


図8 小田原城下(18 地点)の遺物出土比率

これは城下の様相とは大きく異なります(図8)。陶磁器類も、威信財と捉え得る大型品や骨董品はほとんどなく、青磁製品は僅かに数点のみです。この他には鉄砲玉と釘が多数出土しています。

(2)かわらけの特徴

出土しているかわらけの大半は天正年間(1573～1591)に位置づけられるものです。この他、瀬戸・美濃窯大窯第1段階の擂鉢・在地系の瓦質湯釜と供伴している 16 世紀前半に位置づけられるものが第8トレンチとしのかわらけ集中から出土しています。

かわらけには、小田原北条氏が関東に導入した京都系とされる手づくね成形のものが多い特徴があります。また、墨書のあるかわらけが、1号方形竪穴状遺構や3号堀などから出土しているほか、金箔かわらけも *386 号遺構*、9・10 号石組水路などで出土しています。

3. 遺跡の特異性

(1)居館の内と外

前節でも述べたように、出土遺物の比率は御用米曲輪とそれ以外では明らかに異なっています。かわらけについては、小田原北条氏領国では手づくねーロクロ左回転ーロクロ右回転というヒエラルキーがありますが、御用米曲輪では明らかに手づくね・ロクロ左回転のものが多い状況です。

また、小田原城およびその周辺では、これまでに500 地点以上の発掘調査が行われていますが、明確な礎石建物が確認されているのは御用米曲輪のみです。

(2)周辺地域との相違

小田原北条氏領国で、城郭中枢部の発掘調査が実施されている事例は多くはありません。ここでは、八王子城(東京都八王子市)と本佐倉城(千葉県酒々井町)の事例を紹介します。

八王子城御主殿跡の調査成果は、小田原北条領国の中でも最も著名な事例です。八王子城は、小田原北条氏四代北条氏政の弟北条氏照の居城であり、天正 15 年(1587)に近い時期に滝山城(同八王子市)から本拠を移したとされます。

八王子城では、70,000 点を超える遺物が出土しています。また、8棟の建物跡をはじめ、道路状遺構や石敷遺構、溝状遺構、土坑、塀跡・庭状遺構などが良好に確認されています。最も大きな建物跡は9間×15 間の礎石建物SB02 であり、同じく礎石建物SB01 が6間×10 間で続きます。柱間は、6尺2寸4分(189.072 ㎝)～6尺2寸7分(189.981 ㎝)で、6尺2寸6分(189.678 ㎝)が最良の値とされています(土井ほか 2012)。SB02 が主殿、SB01 が会所に想定されており、両建物に挟まれるように池を伴う庭園も見つかっています(図9)。

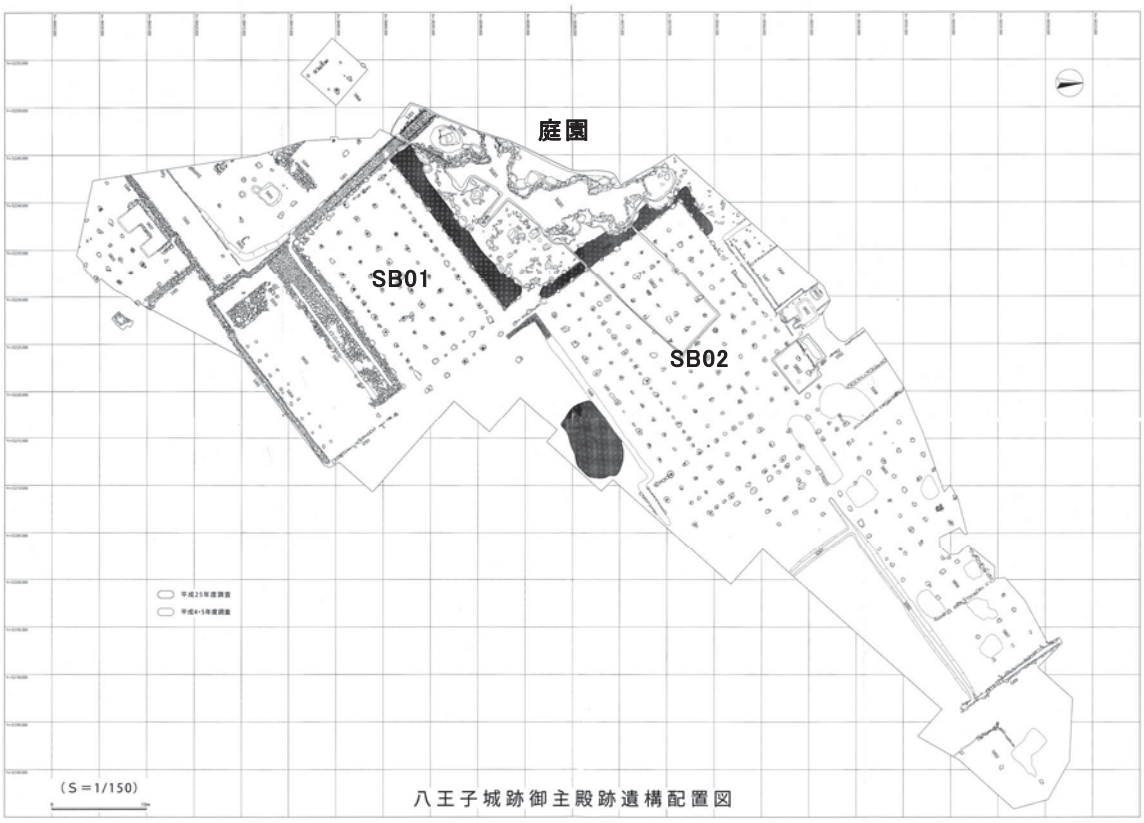


図９　八王子城跡御主殿跡　Ｓ＝1/600

本佐倉城は、北条氏政四男直重が城主となっています。史跡佐倉城跡発掘調査事業に伴い、主郭を構成する城山（Ｉ郭）などで発掘調査が行われています。Ｉ郭では、掘立柱建物 11 棟（建て替えを含む）や、門跡、城戸跡、庭園状遺構、通路跡、塀跡、土留跡が検出されています。唯一、付属建物（3間×2間）を伴う5間×4間の2号掘立柱建物跡が「主殿」、庭園状遺構に面した5間×3間の3号掘立柱建物跡が「会所」と想定されています。

柱間は複数の尺間で計測されていますが、先の2号掘立柱建物跡は6尺3寸～7尺2寸、3号掘立柱建物跡は7尺と報告されています。庭園状遺構は、長軸 8.2m・短軸 3.6mの深さ 0.35mの楕円形の凹みと長軸7m・短軸4m・高さ 0.6mの高まりで形成される遺構であり、3号掘立柱建物跡に面した南側で確認されています（広瀬 2010）。

4．まとめ

（1）居館整備、作庭の契機と画期

御用米曲輪検出の遺構は、概ね16 世紀後半に位置づけられます。そして、16 世紀後半における画期とし得る歴史事象としては、代替わりや婚姻に基づく居館整備・庭園作庭の可能性が考えられます。その中では、以下の6点を文献史料から抽出することができます。

① 天文 23 年（1554）12 月、武田晴信の娘（黄梅院）が氏政へ入嫁
② 永禄2年（1559）12 月、三代氏康から四代氏政への代替わり
③ 元亀2年（1571）10 月、氏康が死去（氏政が最高権力者に）
④ 天正8年（1580）3月、織田信長への従属を選択
　天正8年（1580）8月、信長の娘の輿入れを想定した四代氏政から五代氏直への代替わり
⑤ 天正 11 年（1583）8月、徳川家康の娘督姫（良正院）が氏直に入嫁
⑥ 天正 17 年（1589）11 月、豊臣秀吉が北条氏直に宣戦布告

この他、永禄元年(1558)4月 15 日から8月まで、古河公方足利義氏が小田原に滞在しており、4月 28 日には氏康私邸への御成りがあります。そして、天正 12 年(1584)以降は豊臣秀吉との対立構造が明確となり、文献史料からは断続的な小田原城整備の状況を確認することができます。さらに、天文2年(1533)、天文 10 年などには勅使が小田原へと下向しています。

このような人の動きを画期と捉え、小田原北条氏の内情を見みると、永禄2年(1559)に隠居した氏康は、「御本城様」と呼ばれながら引き続き実権を握り(②～③)、氏康の死後、満を持して氏政が最高権力者となります(③～)。

実は、前述の通り御用米曲輪には戦国期より「百間之蔵」が存在し、その系譜を受けて江戸期にも「米」曲輪となったとする考え方がある一方で、北条氏政居館に比定する説もあります(森 2009)。永禄 12 年(1569)の武田信玄の小田原来攻の際の記録として、『甲斐国志』には「小田原押寄彼城下無残所放火」「號蓮池地迄押入」とあり、武田信玄書状には「為始氏政館悉放火、其外彼一類城郭不胎撃砕」と表現されています。記されたように、蓮池まで押し寄せて氏政館を放火したとすれば、氏政館が御用米曲輪周辺に立地していた可能性は高いことになります(図1)。

永禄 12 年と言えば、氏政が当主の座にありながらも隠居した氏康が実権を握っていた時期に相当します。隠居した氏康が「御本城様」と呼ばれていることを考えると、当主である氏政の居館は「御本城」と呼ばれる小田原城の中心ではなかったものと思われます。そして、氏政自身は、隠居後に「御本城様」ではなく「御隠居様」と呼称されている点も、氏政の居所が「御本城」とは異なる場所であったことを意味しているものと思われます(④～)。

このように考えると、発掘調査で確認された御用米曲輪の建物群や庭園は、小田原北条氏の最高権力者が住まう場のものではありませんが、北条氏政居館に由来する可能性が高いと言えます。

そして、御用米曲輪の遺跡が示すように、氏政の時には二代氏綱が積極的に京都文化を取り入れることで成立した「小田原文化」からは進展し、領国内の支城で京都志向の庭園等が受容され続けている一方で、小田原に独自の庭園を構築するような文化が育まれつつあったと評価できます。

(2)今後の調査・整備の方向性

御用米曲輪では、現在も修景整備事業が進められています。今年度は、近世土塁の整備を行っており、それに伴い一部発掘調査も実施しました。今後は「史跡小田原城跡本丸・二ノ丸整備基本構想」に基づき、御用米曲輪の曲輪取りについては小田原城跡全体の整備方針に従って【近世期】の状況で整備を行う予定です。その反面、【戦国期】の遺構が色濃く検出された南側一帯については、【戦国期】の様相を反映した整備計画を進めるとの方針が、史跡小田原城跡調査・整備委員会において決定されました。

御用米曲輪の調査成果については、今年度概要報告書を作成いたしました。これだけの遺跡を1年で整理するという過酷なスケジュールであったため、不十分な内容である点は否めませんが、作成した概要報告書を糧に今後の検討作業、整備事業が進められるものと考えています。

引用文献

田代道彌 1995 「小田原城－その変遷と遺構の展開－」『小田原市史』城郭編、小田原市
土井義夫ほか 2012 『八王子城』平成二十四年度特別展、八王子市郷土資料館
広瀬千絵 2010 『本佐倉城跡発掘調査報告書Ⅲ』)、酒々井町教育委員会
森 幸夫 2009 「戦国期小田原城－北条氏歴代当主はどこにいたのか－」『小田原市郷土文化館報』№45、小田原市郷土文化館

大友氏館跡の調査成果

大分市教育委員会文化財課
五十川　雄也

図 1 大分市の位置図

はじめに

現在、大分市は、人口約 47 万人の中核都市で、大分臨海工業地帯に代表される産業都市である。中世の豊後府内は、その大分市の中心ともいえる JR 大分駅などの中心市街地近くに位置している。

おおいたは、古代より、九州の東の玄関口としての役割を果たしてきており、特に瀬戸内海を介しての他地域との文化的交流は、盛んに行われてきた。その中でも大分市は、奈良時代に国府が置かれて以来、おおいたの政治・経済・文化の中心として栄えてきた。今回は、中世豊後国を治めた大友氏について考え、特に経済・文化的にも画期として位置づけられる 16 世紀後半に的をしぼり、大友氏の拠点であった豊後府内を中心に説明していきたい。

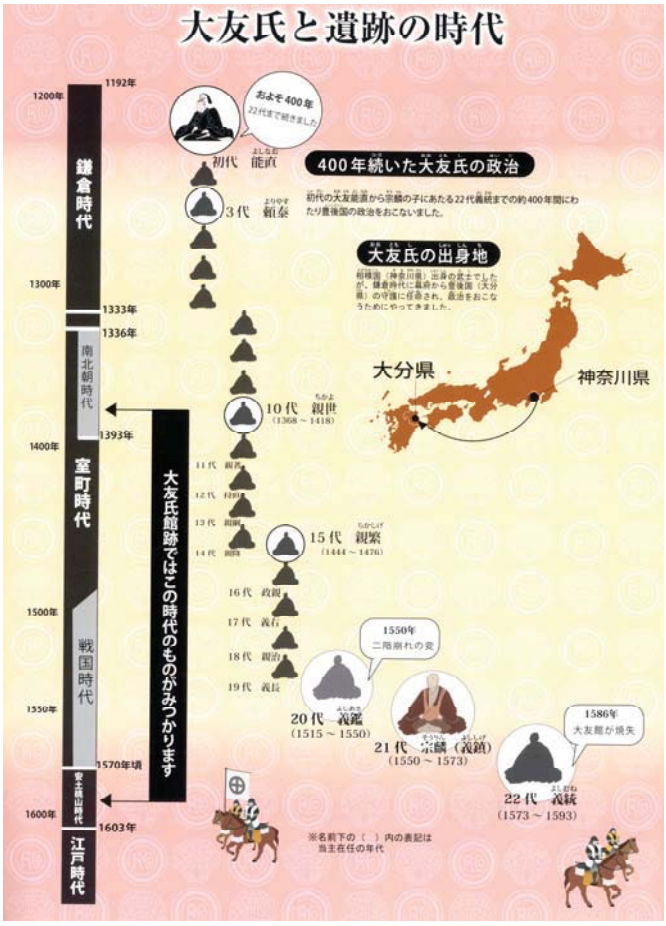


図 2 大友氏の略家系図

1　中世豊後国の支配者　大友氏一族

大友氏は、現在の神奈川県小田原市の出身であり、1196 年の鎌倉時代に大友初代当主能直が豊後・豊前国の守護職に任じられたことからはじまり、約 400 年にわたり、豊後国を本拠とした。特に 21 代当主宗麟の頃には、筑前・肥前等北部九州 6 カ国を治めるまで成長し、戦国大名としての威容を示した。

大友氏の豊後入国は、3 代頼泰の頃とされており、元寇に際して、鎮西探題として下向したのがきっかけといわれる。その後、南北朝期の大友氏は、南朝方や北朝方に振り回されることになるが、10 代親世の頃に南北朝期が終息する。戦国時代に入ると、19 代義長は、分国法を定め、領国支配の確立へ向け、奔走する。20 代義鑑から 21 代宗麟への家督委譲は、大友家の内紛である「二階崩れの変」により実現する。1551 年には、宗麟はフランシスコ・ザビエルを山口から招き、キリスト教の布教を許可した。このようなことで、豊後国には、イエズス会の

表１　大友氏 21 代大友宗麟と 22 代義統を中心とした略年表

中央政権の動き	大友氏の動き	大友氏と覇権を争った戦国大名の動き
	1530(享禄3年) **大友宗麟、生まれる**	
1534 織田信長、生まれる		
		1535 島津勝久、府内沖の浜に逃れる
1537 豊臣秀吉、生まれる		
	1545 このころ、初めてポルトガル人が府内を訪れる	
	1550(天文19年) 二階崩れの変で父大友義鑑殺害される。**義鎮(宗麟)、家督を継ぐ**	1550 龍造寺隆信、本家を継ぐ
1551 織田信長、家督を継ぐ	1551 ポルトガル船、初来航 ザビエル、府内訪問	1551 大内義隆、陶隆房により暗殺される。
	1555 中国人鄭舜功、府内訪問	
	1556 府内病院が開設される	
	1557 府内教会にて、日本人による聖歌隊が結成される	1557 毛利元就、大内氏を攻め、大内義長、自害する
	1559 義鎮(宗麟)、九州6ヶ国の守護となる	
	1561 門司城攻防戦にて、大友氏、毛利氏に大敗する	
	1562 義鎮、宗麟と号し、剃髪し、臼杵に移る	
	1564 将軍足利義輝の調停により、大友氏と毛利氏、和睦を結ぶ	
	1566 毛利氏、和睦を破り、再び北部九州に進出する。大友氏と激戦を繰り返す	
1567 信長、美濃攻略。岐阜を本拠とする。宗麟、織田信長に、「赤壁賦図盆」を贈る		
1568 信長、足利義昭を奉じ、上洛。義昭を15代将軍とする		1569 北部九州の毛利軍、撤退する
1570 信長、大友宗麟に毛利氏との和睦を勧める	1570 大友宗麟、筑後高良山に出陣し、龍造寺隆信の本城佐嘉城を包囲。隆信、大友軍の本陣に奇襲をかけ、勝利する(今山合戦)	
		1571 毛利元就、死去(75歳)
1573 室町幕府、滅亡する	1573(天正元年) 宗麟、家督を長男義統に譲る	
	しかし、後見役として引き続き領国支配に関与する	1574 島津義久、薩摩・大隈を平定す
1576 信長、安土城を築造する		1577 島津義久、日向南部を攻略する
	大友館の「土囲廻屏」が造られる	
	1578 日向高城耳川合戦にて、大友氏、島津氏に大敗する	
	1581 府内にコレジオができる	
1582 信長、本能寺の変にて死去	1582 天正少年遣欧使節が派遣される	1582 島津氏、肥後を攻略する
		1584 龍造寺隆信、島原沖田畷にて島津氏と戦い、戦死
1585 豊臣秀吉、関白となる 秀吉、大友・島津両氏に即時停戦を命じる		
1586 4月宗麟、大坂城に参上し、停戦令・国分令の受諾を表明 7月秀吉、停戦令を無視した島津氏平定のため軍事動員令を発動する 10月島津氏、豊後へ侵攻、12月戸次川原の合戦、府内の町焼き払われる(その後復興)、占領状態のまま越年する		
1587 5月島津義久、秀吉に降伏。九州の戦国時代に終止符が打たれる		
	1587(天正15年) **大友宗麟、死去(58歳)**	
1590 秀吉、全国平定		
1592 秀吉、朝鮮国に侵攻する(文禄の役)。大友吉統(義統)も出陣する		
1593(文禄2年) **大友吉統、朝鮮での失態を理由に秀吉により豊後国を没収される。**		
	1595(文禄4年) **大友吉統(義統)水戸にて「當家年中作法日記」を記す**	

日本における布教本部が置かれることとなり、経済的にも文化的にも大きな飛躍を遂げることになる。豊後府内は南蛮文化が花開き、輸入品には、中国・朝鮮産の陶磁器はもちろんのこと、タイ・ミャンマー・ベトナム等の東南アジア諸国からの品々もある。また、まちには西洋式病院が開設されたり、西洋音楽、西洋演劇も行われたりした。しかし、1578 年に日向国（現：宮崎県）において、島津氏に大敗すると、1586 年には島津氏の豊後侵攻がはじまり、一時、豊後府内を島津軍に占拠されてしまう。しかし、天下統一を目論む豊臣秀吉の援軍により窮地を脱する。その後、1593 年に大友氏 22 代当主義統が、秀吉による朝鮮出兵の折、失態を犯したため、豊後国を改易されてしまい、ここに中世より約 400 年豊後国を治めた大友の時代は終わりを告げた。

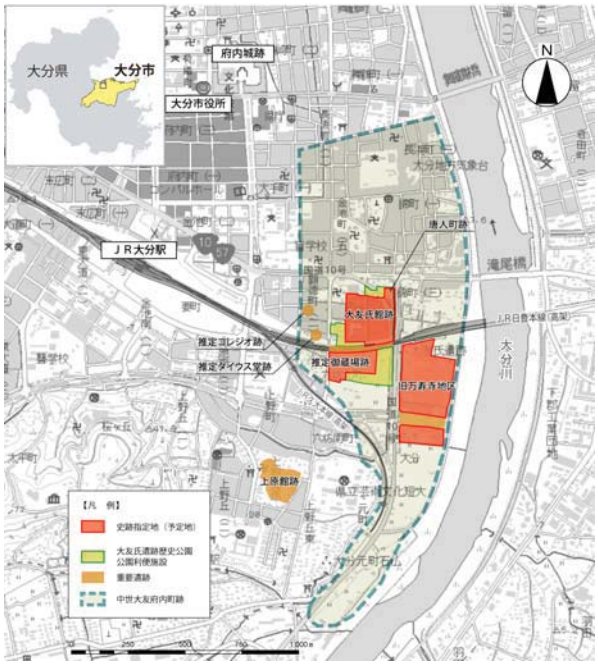


図 3 現代地図に映した中世大友府内のまち

2　中世大友府内町の成立と展開

中世大友府内町跡は大分川の河口西岸の沖積地上に立地している。16 世紀後半のまちの規模は、府内古絵図をもとにした「戦国時代の府内復原想定図」によると、南北 2.1km、東西 0.7km の範囲に及び、大友館がまちの中心にあたり、東西南北に格子状の道路が整備され、40 ほどの町が形成されていた。この府内復元想定図は、平成 10 年頃から本格化した府内のまちの発掘調査で、府内復原想定図の中で想定した箇所とほぼ同一地点で道路跡や町屋跡が確認されており、府内復原想定図の信憑性は高まっている。またこれまでの発掘調査結果から、武家地と商家などが混在する「洛中洛外図屏風」に描かれる戦国時代の京都のまちに似たものであったこともわかりつつある。

ところで、府内のまちの起源は、大友氏が豊後入国前の 11 世紀に、豊前国宇佐神宮の所領を記した『宇佐神領大鏡』に「勝津留畠」として登場し、大分川河川沿いには「市河」として市場等の存在が考えられている。本格的には、1306 年に 5 代当主貞親が、万寿寺を建立することにより、徐々にまちは発展していく。そして、14 世紀後半以降に大友館が万寿寺の北西に近接して建てられたあと、道路などを整備することでまちを拡張し、16 世紀後半には府内復原想定図のような様子に至ることになるが、1586 年の島津氏の侵攻により、まちは焼失する。島津氏が撤退した後、まちは復興するようであるが、大友館は府内のまちの中心には、再建されなかったことが発掘調査からわかってきている。

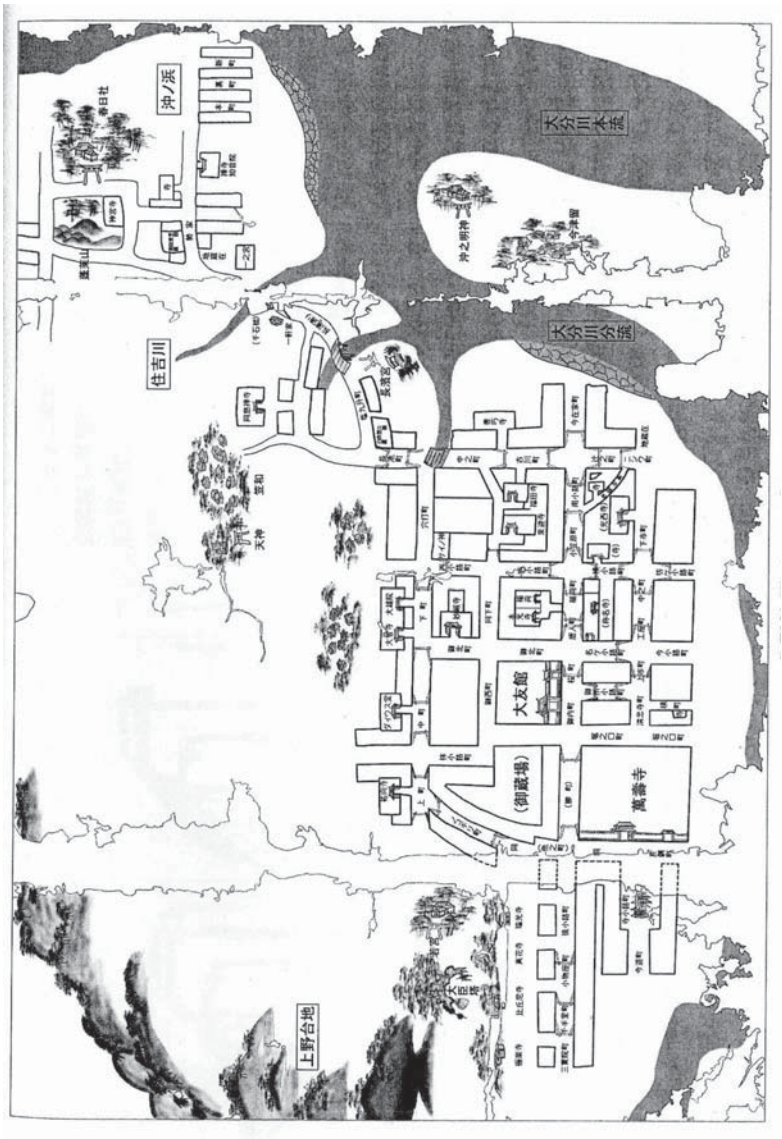


図 4 府内古絵図をトレース・活字化した図

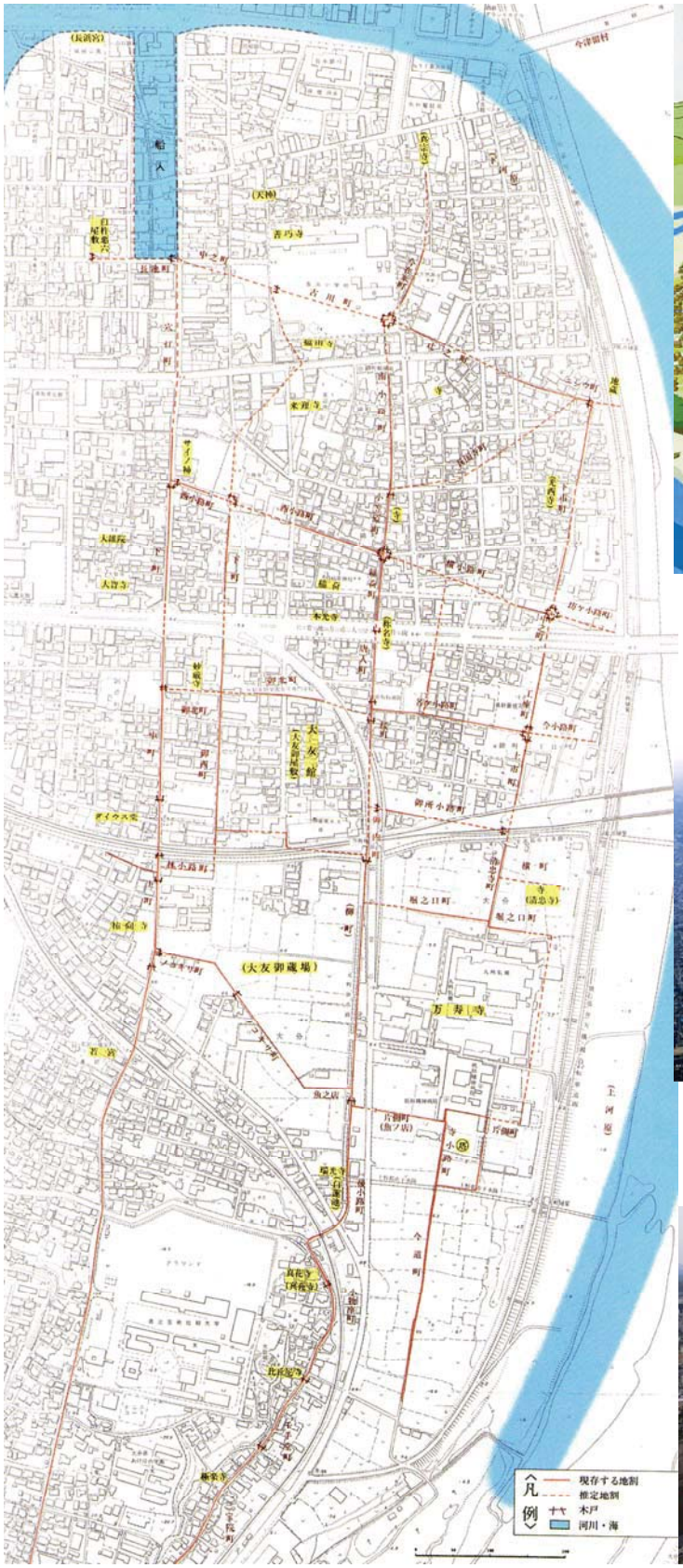


図 5 戦国時代の府内復原想定図

図 6 別府湾からみた府内のまち復元イメージ図（上が南）

写真 1 別府湾からみた府内のまちの範囲（上が南）

写真 2 大友氏館跡と高崎山（城）（南東から）

３　大友氏の拠点－１６世紀中頃～後半の大友氏館　大友宗麟･義統期の成果－

大友氏は府内のまちの中心に拠点となる館を建設するが、その他にも、まちの中心にある館から800m ほど南にある上野台地と呼ばれる比高約 30m の高台にも上原館とよばれる大友氏の館を築いており、まちの中心に位置する館が発見されるまでは、この上原館跡が大友氏の拠点的な館とされていた。またこの上原館のある台地上を西に約 10km いくと、大友氏の詰め城といわれる高崎城がある。豊後府内は、まちの中心にある館、上原館、高崎城というラインで防衛にあたっていた可能性が高い。

またさらに、大友宗麟は 1562 年頃、その政庁を豊後府内から南に約 30km に所在する臼杵市の丹生島に一時的に移したとも考えられている。この丹生島は 1586 年の島津氏侵攻の際、大友宗麟自ら立て籠って、「国崩し」といわれる大砲を使用し、島津氏の攻撃を退けている。

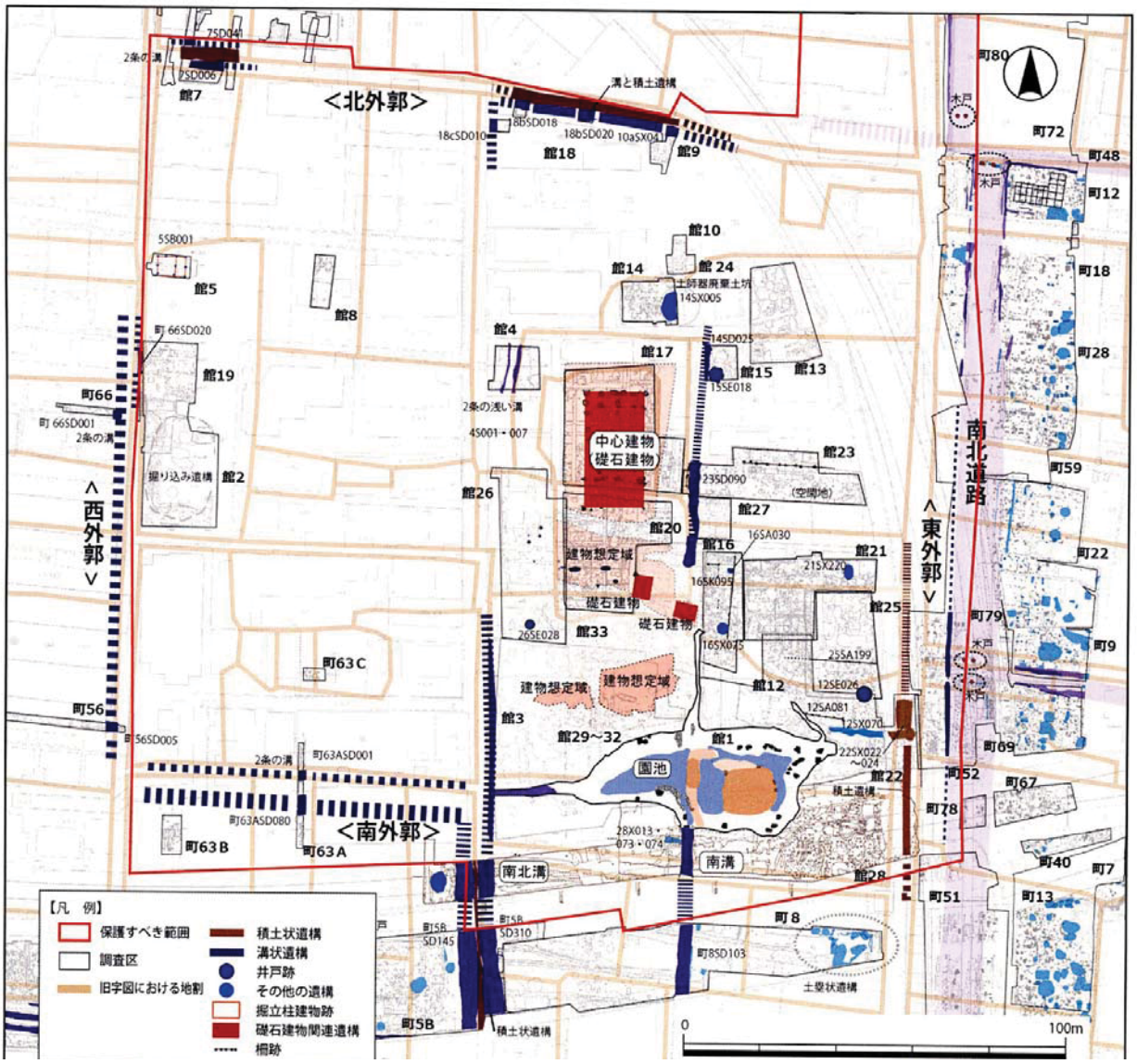


図７　第Ⅴ期（16 世紀後半～1586 年頃）の大友氏館の状況

大友氏館跡　大友氏館跡は宗麟・義統代に、一辺 200m 四方に拡張したことが発掘調査でもわかっている。大友氏館跡内の発掘調査はこれまでに 33 回行われているが、館全体面積の４０％ほど

図 8 第Ⅴ期の中心建物跡

図 9 第Ⅴ期の館北・西・南外郭イメージ
（土囲廻塀）

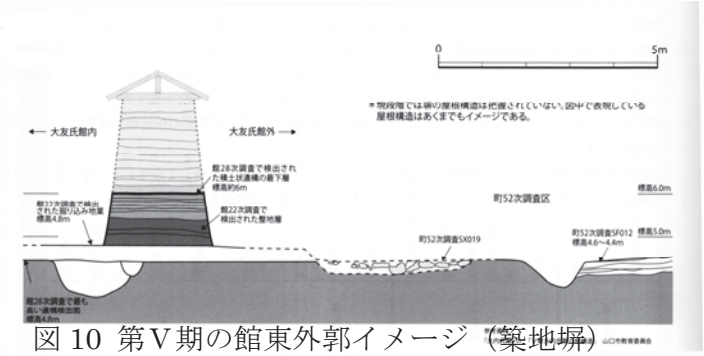


図 10 第Ⅴ期の館東外郭イメージ（築地塀）

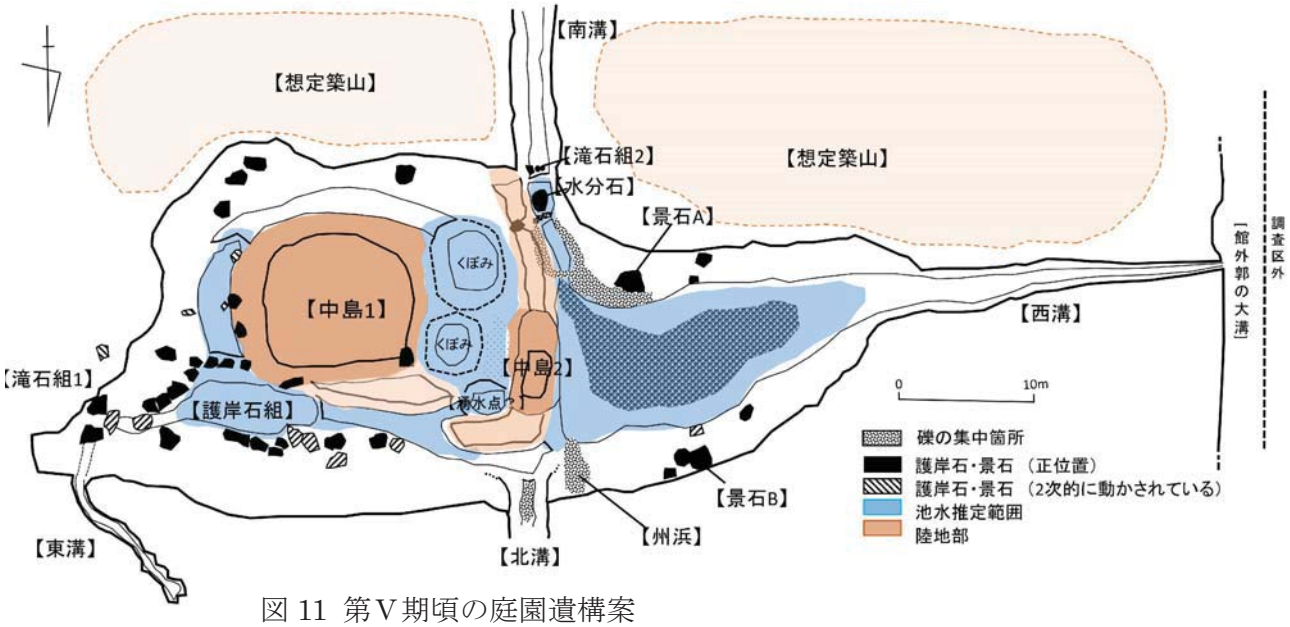


図 11 第Ⅴ期頃の庭園遺構案

写真 3 館内より出土した
中国元時代の梅瓶類

写真 4 館内で儀式儀礼に使用されたかわらけ

であり、まだその詳細な内容については不明な部分が多いが、これまでの発掘調査成果から、３つのことがいえる。１つ目は中心建物跡と考えられる箇所についてであり、調査では礎石下の栗石を詰めた下部構造が検出されている。この礎石跡は、東西 15m、南北 30m の範囲に及び、この範囲が建物構造を示すと推定されている。また、この中心建物跡の周辺からは儀式や儀礼で使用されたと考えられるかわらけ溜まりが多く見つかっている。２つ目は、館の外郭構造である。館の北・西・南の外郭構造は、２条の溝が平行しており、その２条の溝間約４～５ｍには、積み土の痕跡が一部認められた。この構造は文献史料で、「土囲廻塀」と出てくるものと関連があると想定されている。一方で、館東側は、府内古絵図等を参照すると大門などが描かれており、館東側が正面と考えられているが、発掘調査によって、築地塀の一部と考えられる痕跡が検出されている。このようなことから、館の外郭施設は、館の北・西・南と正面である東側とはその構造が異なることが発掘調査でわかっている。３つ目は、現在発掘調査を行っている庭園跡である。大友氏館内の南東側に位置している。庭園は 15 世紀後半には築かれており、16 世紀後半まで最低２回の改修があったことがわかっている。特に２回目の改修が、大友宗麟・義統の頃と考えられ、園池の大きさだけでも東西 67m、南北 30m の巨大なものであり、周辺の築山などを想定すると庭園の面積は 5000 ㎡を超え、その他戦国大名の館に築かれた庭園単体面積と比較すると大友氏館跡の庭園は最大級となることがわかってきた。出土遺物は、宗麟・義統期の頃は、かわらけは京都のものを模した京都系かわらけとよばれる手捏ね土器が主体で、廃棄穴等から出土する。また館を特徴づけるものとして、中国元時代の染付である梅瓶類や中国龍泉窯系の夜学型器台や酒海壺など高級な陶磁器類が出土している。また庭園跡からは備前焼きを中心とした茶器などが出土するなど、まちから出土する遺物と比較して、そのあり方は相違していると考えられる。

以上のように、現状での大友氏館跡の考古学的な成果を述べたが、大友氏館内の諸施設や館に関わる人々についての詳細は、大友義統が晩年に記した『當家年中作法日記』にもみることができる。

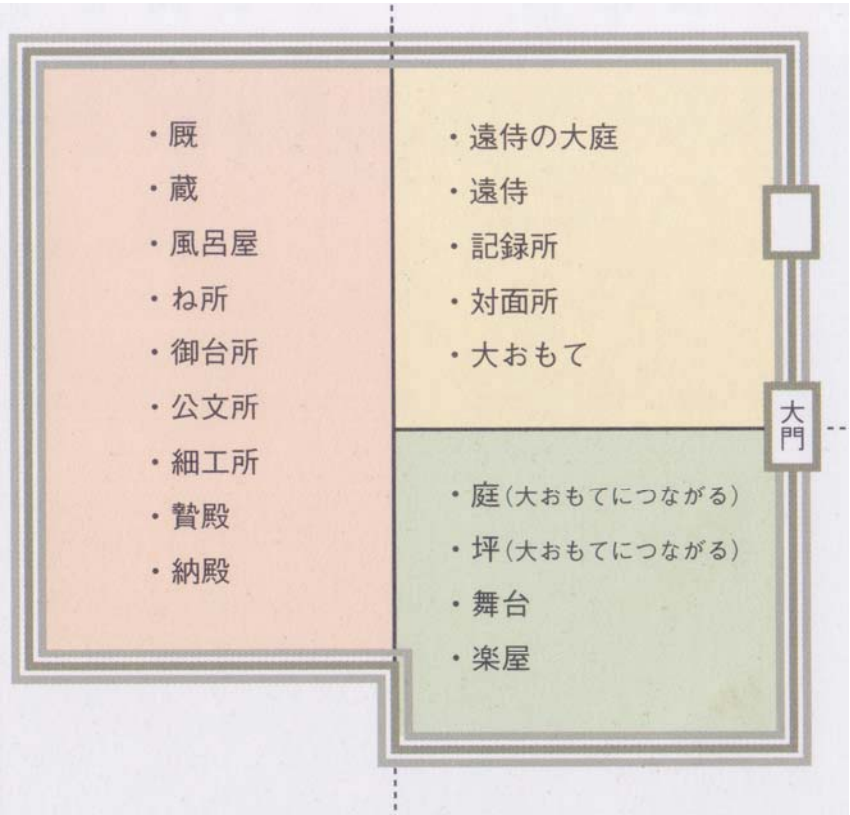


図 12 「作法日記」から想定される大友館内部の様子

表 2 「作法日記」にみえる大友館の主な行事

月日（旧暦）	行事の内容	月日（旧暦）	行事の内容
12 月 31 日	・大歳の夜納（正月祝物の飾りつけ）	1 月 16 日	・評定始（仕事はじめ）
1 月 1 日	・せんす万歳	1 月 19 日	・簾中かた節（婦人方の祝い日）
	・対面（年寄衆・親類衆など）	1 月 20 日	・犬追物
	・諸侍が参賀に訪れる（この日より 15 日まで）	1 月 29 日	・大おもて節（大おもての祝い日）
	・祝三献	3 月 3 日	・草餅を肴に飲食（上巳の節句）
	・謳初	3 月 10 日頃	・方々の狩
1 月 2 日	・馬乗初 ・船乗初	5 月 5 日	・粽を肴に飲食し、軒に菖蒲や蓬を飾る（端午の節句）
1 月 3 日	・対面なし（赤日にあたるため対面をさける）	6 月 15 日	・祇園会
1 月 4 日	・諸寺家衆らが参賀に訪れる	6 月 28 日	・御祓
1 月 5 日	・簾中方へ宿老・聞次衆の使いが参賀	7 月 7 日	・七夕（七夕の節句）
1 月 6 日	・鬼のまめ（豆まき）	7 月 8 日	・生見の祝（生身魂の祝い）
	・方違	7 月 12 日	・大風流（12．26 日の両日）
1 月 7 日	・由原宮師が参賀に訪れる	7 月 14・15 日	・先祖供養（盂蘭盆）
	・白馬が大門より参る	8 月 1 日	・八朔規式
1 月 9 日	・対面なし（赤日にあたるため対面をさける）	8 月 8 日	・秋あわせ（衣替え）
1 月 11 日	・吉書	8 月 14 日・15 日	・放生会
	・斧立（惣大工）	8 月 15 日	・名月祝（お月見　9 月 13 日も同様）
	・正月の祝い飾を取り除く	9 月 9 日	・菊酒の飲酒（重陽の節句）
1 月 13 日	・蔣山へ行初	10 月亥の日	・亥の子（新穀でついた餅を食べて祝う儀式）
1 月 14 日	・花のおこない（由原から花が献上される）	12 月 13 日	・評定おさまり（仕事納め）
1 月 15 日	・歳男参上（歳男の勤役を解き盃を給う）	12 月 27 日	・煤払い

注 行事名については、文中の言葉をできるだけ採用したが、それだけで意味がわからないものはその内容を要約して記した。また、（　）で補足説明を行なった。

表 3 「作法日記」にみえる大友館に関わる人々

役職名	備　考	役職名	備　考
宿老衆		覚悟衆	
聞次衆		贄殿衆	
椀飯奉行	人員 5 人	伽衆	
酒奉行	人員 3 人	小納殿衆	
寺（家）奉行		中間衆	対面は敷居の外
社奉行		別當	馬に関わる
申次		御厩衆	対面は敷居の外
内証の衆		力	
右筆衆		執當	対面は敷居の外／諸事切盛り
（奥の）蔵番衆	人員 3 人	兄部	
御台番衆	人員 6 人	局	一の台局あり
おもて番衆		女房衆	
おくの番衆		女中	宿老・聞次衆・公文所女中あり
間々の番衆		惣大工	館の建物に花をかざる。（由原宮や祇園宮の普請に関わる）
宿老の与力		桶結御作	対面は敷居の内
公文所の与力		匠（工）御作	対面は敷居の内
猿楽衆		塗師御作	対面は敷居の内
同朋衆	間々の火を扱う	土器作	

注　役職名については「作法日記」の表現のまま記した。

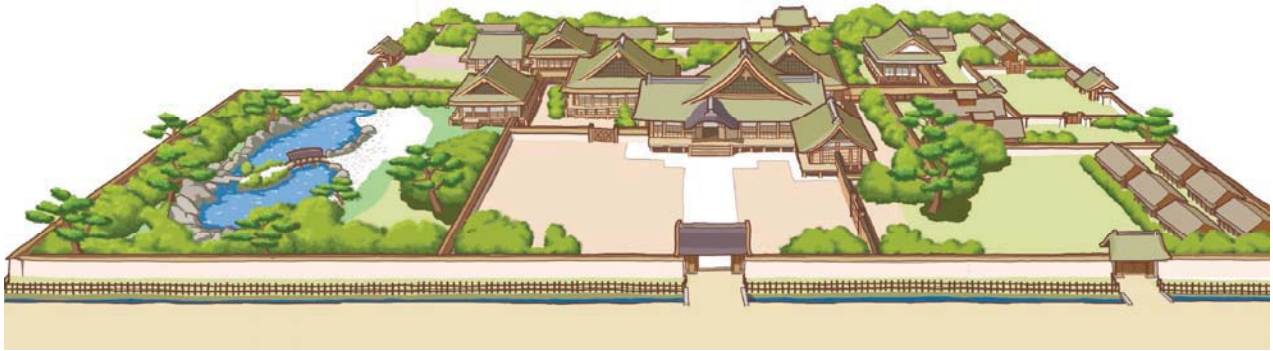


図 13 大友氏館第Ⅴ期の想像復元図（図下が東）

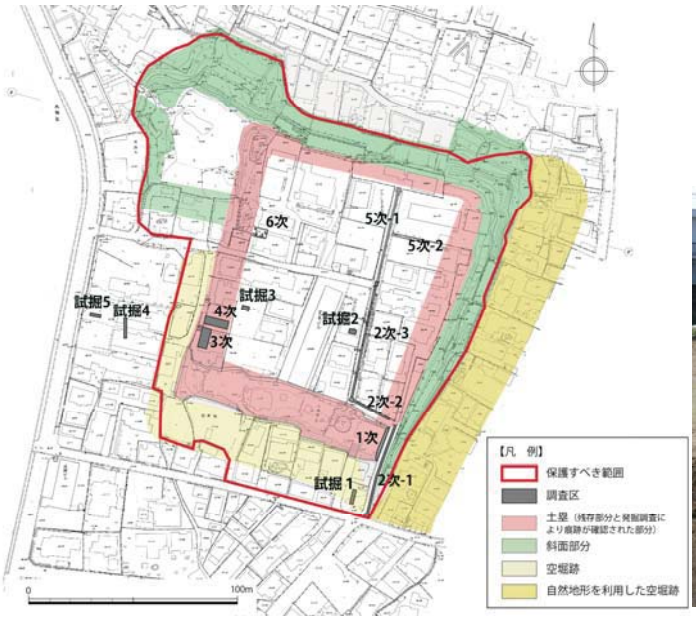


図 14 上原館跡

写真 5 上原館跡 南側土塁

図 15　16 世紀末の臼杵城・臼杵町推定復元図

写真 6 現在の臼杵城正面（南西から）

上原館跡　上原館は、主郭部と北西側の張り出し部の曲輪から成り、比高約 25m の台地上に立地する。主郭部の規模は、東西 112m、南北 150m である。また主郭部の周囲には大規模な土塁を廻しており、残存状況の良い南側土塁で、基底幅 17m、高さ 2,5m を測る。北面以外の 3 方は堀跡が観察でき、南堀幅約 20m、東堀幅 30m、西堀幅 10m である。上原館跡の発掘調査は多く行われていないが、これまでの調査成果から、15 世紀後葉～16 世紀前葉には築かれており、16 世紀後葉に大改修の痕跡があることがわかっている。大改修の痕跡は、1586 年の島津氏の豊後侵攻に伴う改修であろう。また、まちの中心の館と決定的に違うことは、比高約 25m の高台に位置することや、館の周囲を大規模な土塁や堀、切岸等で防御性を高めていることである。このような上原館は、緊急時に対応できる館でもあり、上原館でも防衛が厳しい時には、さらに防御性の高い高崎城（標高 628m）に移動したと考えられる。

丹生島城（臼杵市）　丹生島は四方を崖に囲まれた天然の要害の島であり、当時、周囲のほとんどは海で囲まれる状況にあった。また島上は、標高約 21m であり、東西約 500m、南北約 200m の広さを有する。この丹生島は近世も臼杵の拠点として近世城郭が整備されており、中世の状況は不明な部分が多いが、ルイスフロイスの『日本史』によると、丹生島には館の他に、クラ、礼拝堂等の宗教施設等もあったようで、豊後府内の館の様子とは違った、いわば、館の機能を通常時も保持しつつ、防御の効果も上げたうえ、さらに豊後府内にある館内では確認できていない宗教施設が築かれるなど、豊後国城館の発展的形態を示しているともいえる。

４　大友宗麟・義統期の南蛮文化で栄えたまち

５　1586（天正 14）年島津氏の豊後侵攻から大友氏の豊後国支配の終焉へ

1586 年の島津氏侵攻以降、大友氏の拠点はどこにあったのか不明であり、上原館とも丹生島ともいわれる。その後、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際には、大分市東部の鶴崎という場所から出陣したと考えられており、最終的な拠点は鶴崎にあった可能性もある。しかし、1593 年の朝鮮出兵中に、義統が失態を犯したことにより、秀吉から豊後除国の命を受け、約 400 年間続いた大友氏の豊後支配は終焉を迎えた。また義統は、関ヶ原の合戦の時、大友氏の再興を図るため九州で兵を上げるが、黒田官兵衛に敗北し、その夢は途切れた。しかしながら、その後、江戸幕府の儀式儀礼を司る高家として迎えられている。

おわりに

【引用・参考文献】

大分市史編さん委員会 1987『大分市史（中）』
大分市教育委員会 2006『中世大友再発見フォーラムⅡ 府内のまち 宗麟の栄華』
玉永光洋・坂本嘉弘 2009『大友宗麟の戦国都市』新泉社
大分市教育委員会 2013『6 年郷土学習資料 府内から世界へ大友宗麟』
神田高士 2013「大友都市臼杵とは何であったか」『大内と大友』勉誠堂出版
玉永光洋 2014「戦国都市　豊後府内　空間構造と府内再移転を中心にして」『臼杵史談』第 103 号 臼杵史談会
大分市教育委員会 2014『史跡大友氏遺跡保存管理計画書』
大分市教育委員会 2015『史跡大友氏遺跡整備基本計画（第 1 期）』
大分市教育委員会 2015 『大友氏館跡 1』

勝瑞城館跡の調査成果

重見髙博（藍住町教育委員会）

はじめに

（1）　立地と環境

藍住町は吉野川水系によって形成された沖積平野からなり、100％平野の町です。勝瑞城館跡は藍住町の東端に位置し、周辺の標高は約 3mです。町の北辺を流れる旧吉野川南岸に形成された自然堤防帯の東端に位置し、旧吉野川下流の撫養や木津、吉野川下流の別宮等、流通の拠点となる港町を掌握できる位置にあり、これらの港町を経済基盤として発展したことが考えられています（仁木2014)。

写真１　藍住町の空中写真と勝瑞城館跡の位置

（2）　歴史概略

勝瑞は、室町時代後半に阿波国守護細川氏が守護所を置いた地で、その後戦国時代に阿波の実権を握った三好氏もまた本拠とした地です。勝瑞城館跡は、三好氏の居城跡と推定されている遺跡で、平成 13 年 1 月 29 日に国史跡に指定されました。

細川氏は当初秋月（現、阿波市土成町秋月）に置いた守護所を後に勝瑞に移転します。移転時期は諸説あり明らかではありませんが、遅くとも 15 世紀後半には勝瑞守護所が成立します。

三好氏は、鎌倉時代の阿波守護であった小笠原氏の後裔と伝えられる氏族で、三好郡内に居住した小笠原氏がその土地の名前を名乗ったのが始まりであるといわれています。三好氏の名が初めて

史料上に見えるのは寛正 6 年(1465)2 月 24 日付「細川成之奉行人飯尾真覚奉書写」(『阿波国徴古雑抄』所収、『細川三好両家消息』) に、阿波三郡守護代として三好式部少輔が登場します。

その後、史料に実名が見えるのは三好之長で、之長は永正 3 年(1506)に管領細川政元の養子となった阿波守護家出身の澄元の後見人として上洛し、畿内で名の知られる存在となります。しかし、永正 17 年(1520)5 月 11 日、澄元と家督を争った細川高国に敗れて百万遍で自害しました。

之長没後は孫の元長が跡を継ぎます。元長は之長とともに畿内へ出陣していましたが、阿波へいったん帰国しました。元長は、岩倉（美馬市脇町）にあった阿波小笠原氏が宝治 2 年(1248)に創建したといわれる宝珠寺を勝瑞に移転させ、祖父之長の院号「見性寺殿」に因んで見性寺に改称したといわれています(『板野郡誌』)。また、大永 7 年(1527)に管領細川晴元とともに足利義維を擁して堺へ渡海しますが、このとき「井隈之内勝瑞分壱町壱段」を見性寺に寄進しています（大永 7 年 2 月 2 日「三好元長寄進状」)。このことから、この頃三好氏は勝瑞に居住しはじめたと思われます。

元長は堺へ上陸後、細川高国や足利義晴を軍事的に圧倒し、ついには堺を拠点として幕府政治を左右するほどにまで力をつけますが、晴元と対立するようになり、享禄 5 年(1532)6 月 4 日、顕本寺で自害に追い込まれました。

元長の跡を継いだ長男の長慶は、畿内へ進出しました。阿波では次男の実休が勝瑞を拠点に阿波と讃岐、淡路南部を支配しました。阿波三好家は、以後、実休－長治－存保と継承されます。

実休は、天文 22 年(1553)に阿波守護細川持隆を自害に追い込み、実質阿波の実権を握るようになります。永禄 3 年(1560)、長慶の命で河内高屋城に移り、河内南部や和泉方面も勢力下に納めました。永禄4年(1561)三月には御相伴衆となりその存在がますます大きくなりますが、永禄5年(1562)3月、和泉久米田の合戦で戦死しました。

実休の跡を継いだ長治は反三好勢力に追い詰められ、天正 5 年(1577)に長原（板野郡松茂町）の地で自害、存保は天正 10 年(1582)の長宗我部氏の勝瑞侵攻を受け讃岐へ退きました。このことにより、勝瑞では三好氏の時代が終わることとなりました。

また、天正 13 年(1585)には、秀吉から阿波を拝領した蜂須賀氏は城地を徳島に選定し、勝瑞城下にあった寺院を移転したため、細川氏の守護所として、また三好氏の戦国城下町として発展した町も終わりを告げることとなりました。

（3） 調査経過と全体概要

勝瑞城館跡の発掘調査は、勝瑞城跡公園整備事業に伴い平成 6 年度に始まりました。勝瑞城跡は、三好氏の菩提寺である見性寺の境内となっていますが、土塁の一部や濠が残っており、昭和 31 年 2 月 7 日には細川氏の守護館また三好氏の居館跡として徳島県指定史跡に指定されていました。

しかし発掘調査の結果、勝瑞城跡は天正 10 年の長宗我部氏の勝瑞侵攻直前に築かれたものであることが判明し、当初想定されていた細川氏の守護館跡や三好氏の居館跡とはなり得ないことが確認されました。そのため、調査は周辺部へと移りました。

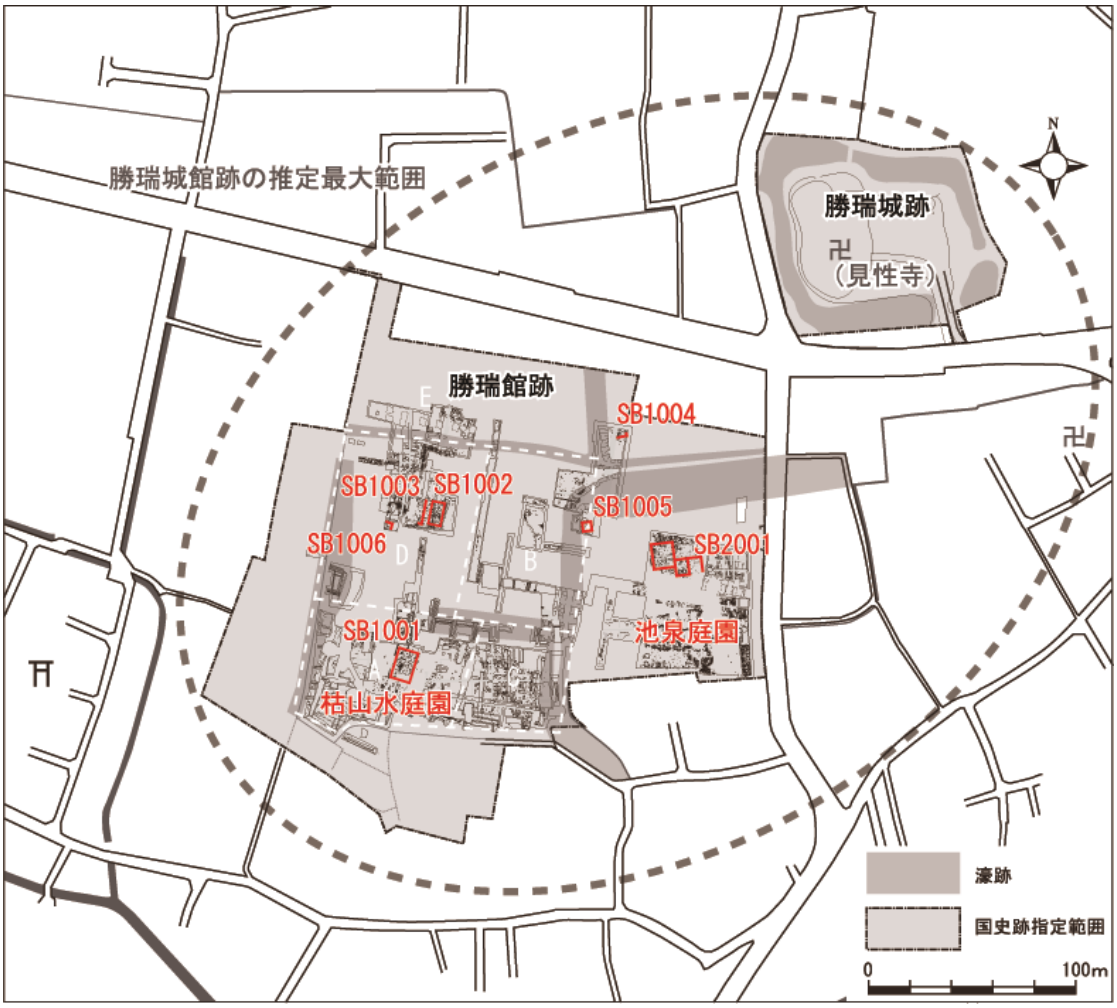
先学の研究（本田 1966、羽山 1974 など）を参考として、地籍図や空中写真を用いた地割調査等の結果、勝瑞城跡の南に大規模な区画が確認されました。発掘調査の結果、区画に沿って幅 10mを越す大規模な濠が検出され、濠に囲まれた区画からは庭や礎石建物跡が検出されました。また、出土する遺物も質・量ともに豊富で、その年代観などから三好氏の居館跡と推定されました。

史跡指定後、平成 14 年 7 月には藍住町勝瑞城館跡調査整備検討委員会を設立し、調査および整備についての方針を検討しており、現在も調査・整備を継続しています。継続した発掘調査の結果、さらに大規模な城館であり充実した内容であることが確認され、平成 19 年 2 月 6 日にも追加指定

を受けました。さらに、平成 26 年度と 27 年度には三好氏の祈願寺である正貴寺跡も勝瑞城館跡の関連遺跡として追加指定を受けています。

勝瑞城館は、大規模な濠に囲まれた複数の曲輪から成る城館で、中心となる曲輪が変遷しながら城館の規模も拡大したと考えられています。

１．検出遺構



第１図　勝瑞城館跡遺構配置図

（１）　検出された建物跡

遺構番号	形態	規模（間）	柱間寸法	主軸方向	備考
SB1001	礎石建物	7*4.5	6 尺 5 寸	N-17°-E	枯山水庭園の北側に立つ
SB1002	礎石建物	6*3	6 尺 5 寸	N-11°-E	SB1003 が焼失後に建てられたモノ
SB1003	礎石建物	6*1(以上)	6 尺 5 寸	N-11°-W	SB1002 の前段階
SB1004	礎石建物	2.5(以上)*1(以上)	6 尺 5 寸	N-9°-W	
SB1005	礎石建物	2*2	6 尺 5 寸	N-7°-W	
SB1006	掘立柱建物	1.5(以上)*1(以上)		N-11°-E	
SB2001	礎石建物		6 尺 5 寸	N-7°-W	池庭の北側。数棟の可能性あり。

◆建物跡は七棟見つかっており、うち六棟が礎石建物跡です。
◆建物の時期は全て 16 世紀後半で、柱間寸法は 6 尺 5 寸（197 ㎝）です。
◆勝瑞城館跡は複数の曲輪が想定されていますが、曲輪毎に建物の主軸が異なっています。

（2） 庭園の有無と特徴

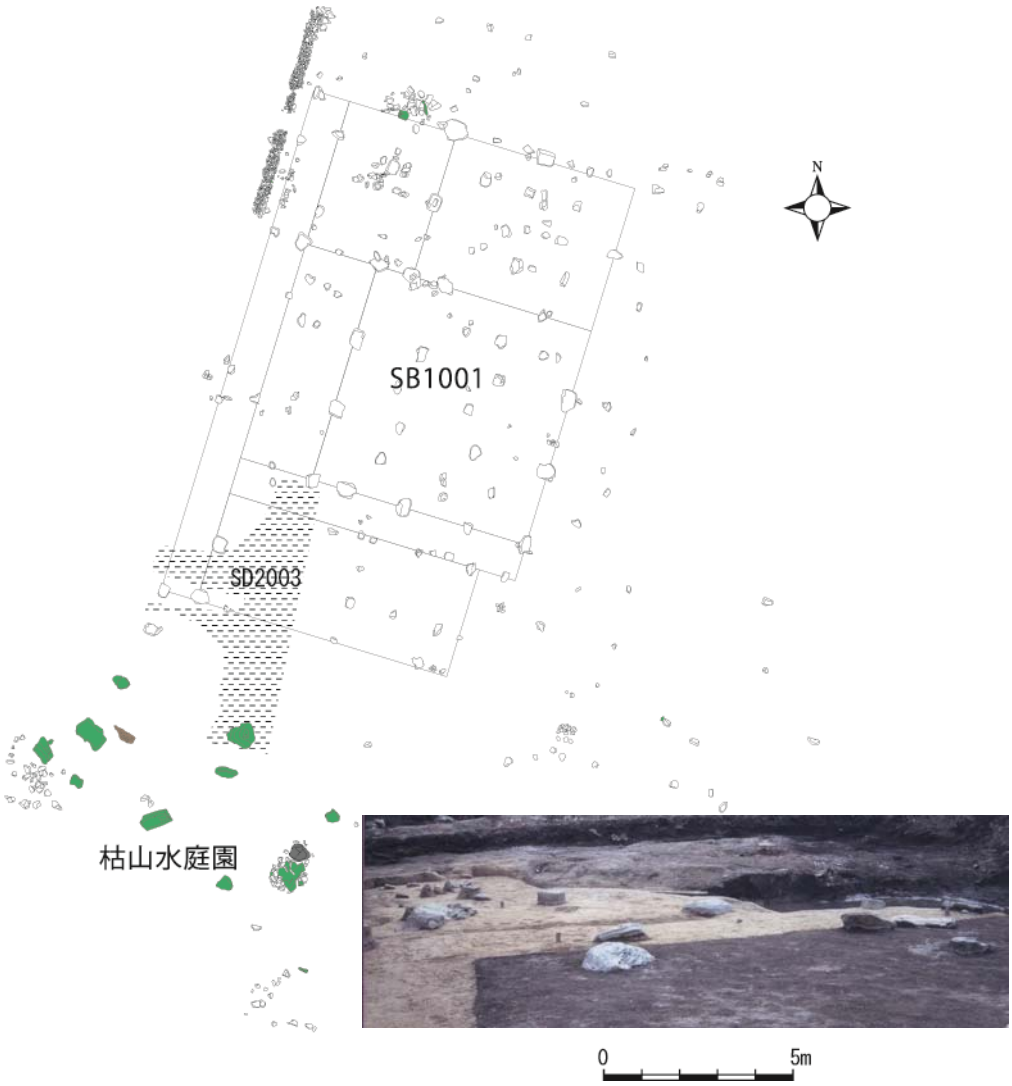
庭園は、SB1001 に伴う枯山水庭園と SB2001 に伴う池泉庭園が見つかっています。

① 枯山水庭園

庭園の下層には大量の土師器皿を包含した溝 SD2001 が検出されています。SD2001 から出土する京都系土師器皿の年代観から作庭時期は 16 世紀第 3 四半期で、1570 年代と考えられます。廃絶は、SB1001 の礎石を覆っていた焼土層から出土する遺物の年代観から 16 世紀末と推定できます。

庭の景石として緑色片岩 9 石、砂岩 2 石、チャート 1 石の計 12 個の石が見つかっています。特徴としては、50 ㎝～1m大の石を単独で配置している点があげられます。

庭園はこれで完結したものではなく、さらに広がりを持つものであろうことは景石の配置等から推定されますが、後世の攪乱によって検出した以外の部分については破壊されていました。



第 2 図　枯山水庭園と礎石建物跡 SB1001

② 池泉庭園

東西約 40m、南北約 30mの範囲に広がる池 SL2001 を中心とした庭園で、16 世紀中葉に造営され、16 世紀後半に廃絶します。勝瑞の最終段階には SB2001 の地点に土師器皿の焼成窯が築造されており、ここまでは存続しない庭園です。池の中央部には掘り残しによる中島があります。

池の東岸は出入りのある洲浜となっており、池の内側に面を持つ砂岩を並べて護岸としています。東岸のほぼ中央部では、法面には拳大よりやや小さな石を貼り付けている部分があり、ここでは護岸の石が東へ曲がり、また途切れた部分があります。ここに溝状のくぼみが認められることから、導水部と推定しています。この導水部と考えられる部分の前の池の中には拳大ほどの砂石を集め中洲を造っており、その中央部よりやや南側に青石の立石が見られます。その他、景石として所々に青石を配しており、池の中に伏せたものや法面に斜めに立てたものがあります。

池の南側は池岸及び中島の南面の両側に石積護岸が見られます。西側から北側では護岸石は認められず、なだらかな法面となっています。

第 3 図　池泉庭園と礎石建物跡 SB2001 模式図

２．出土遺物

（１） 出土遺物の様相（数量など）

出土遺物は、かわらけが 90％前後を占め、そのうち京都系土師器皿が 30～50％です。

供膳具はかわらけを除くと貿易陶磁器が多数を占め中国産磁器がほとんどです。内訳は、白磁と青花がほぼ同様の割合を占め、青磁が少なくなっています。ただ、勝瑞館跡内の南東部（C）や北部（E）の地区では青磁の割合が高くなっており、館内の空間利用の違いがあらわれているのかもしれません。国産では瀬戸美濃焼が少量入ります。

貯蔵具は備前焼が多く、常滑焼や信楽焼等も少量見られます。

煮炊具は土師質土器の鍋・釜が多数を占め、そのうち讃岐系のものが 70～80％、播磨型が 20～30％となっています。瓦質土器の鍋・釜も見られます。

奢侈品では青磁盤、白磁四耳壺、青白磁梅瓶、唐物天目などが出土していますが、特に集中して出土するような傾向は見られません。

地区	国産														中国産						朝鮮王朝産	その他	合計
	土師質土器				瓦質土器	須恵質土器	備前焼			瀬戸・美濃焼				その他	青磁		白磁	青花		その他			
	皿・杯		鍋・釜	その他			擂鉢	壺・甕	その他	鉄釉		灰釉			龍泉窯系	景德鎮系		景德鎮系	華南系				
	手づね	ロクロ								天目茶碗	その他	皿	その他										
南西部（庭園周辺）	18,170	31,107	509	170	356	183	305	633	204	99	11	42	49	118	266	6	321	337	45	14	50	0	52,995
	34.29%	58.70%	0.96%	0.32%	0.67%	0.35%	0.58%	1.19%	0.38%	0.19%	0.02%	0.08%	0.09%	0.22%	0.50%	0.01%	0.61%	0.64%	0.08%	0.03%	0.09%	0.00%	100.00%
	92.98%																						
	94.27%						2.15%			0.38%													
	98.04%														1.87%								
北東部	10,245	4,207	418	71	80	127	136	227	92	33	6	55	23	116	66	3	247	163	67	2	16	0	16,400
	62.47%	25.65%	2.55%	0.43%	0.49%	0.77%	0.83%	1.38%	0.56%	0.20%	0.04%	0.34%	0.14%	0.71%	0.40%	0.02%	1.51%	0.99%	0.41%	0.01%	0.10%	0.00%	100.00%
	88.12%																						
	91.10%						2.77%			0.71%													
	96.56%														3.34%								
南東部	19,209	18,216	828	115	251	106	563	775	257	38	1	38	46	160	340	4	195	163	25	1	97		41,428
	46.37%	43.97%	2.00%	0.28%	0.61%	0.26%	1.36%	1.87%	0.62%	0.09%	0.00%	0.09%	0.11%	0.39%	0.82%	0.01%	0.47%	0.39%	0.06%	0.00%	0.23%	0.00%	100.00%
	90.34%																						
	92.61%						3.85%			0.30%													
	98.01%														1.76%								
北西部	25,476	38,960	586	186	293	141	199	440	163	52	14	14	25	70	166	18	292	173	45	11	60	3	67,387
	37.81%	57.82%	0.87%	0.28%	0.43%	0.21%	0.30%	0.65%	0.24%	0.08%	0.02%	0.02%	0.04%	0.10%	0.25%	0.03%	0.43%	0.26%	0.07%	0.02%	0.09%	0.004%	100.00%
	95.62%																						
	96.77%						1.19%			0.16%													
	98.86%														1.05%								
北部	1,134	1,405	17	39	28	27	60	83	63	14	0	4	7	22	33	0	58	26	2	0	4	0	3,026
	37.48%	46.43%	0.56%	1.29%	0.93%	0.89%	1.98%	2.74%	2.08%	0.46%	0.00%	0.13%	0.23%	0.73%	1.09%	0.00%	1.92%	0.86%	0.07%	0.00%	0.13%	0.00%	100.00%
	83.91%																						
	85.76%						6.81%			0.93%													
	95.94%														3.93%								

※アルファベットは第２図のアルファベットに対応

第１表　勝瑞館跡地区別出土遺物組成表

（２） 出土遺物の特徴（特殊遺物）

特殊な遺物として特筆されるものとしては金箔かわらけがあり、枯山水庭園及び池泉庭園のいずれからも出土しました。

また、出土遺物の特徴は、かわらけと陶磁器の出土傾向にみられます。京都系かわらけは 16 世紀第 3 四半期以降が中心です、中国磁器は青磁細線蓮弁文碗、腰折れ稜花皿、白磁端反皿、青花碗 C 群・皿 B1 群・皿 C 群が中心となっています。華南系青花は一定量入り、青花碗 E 群も見られますが、他の地域で 1570 年代を下限とする遺跡でも出土している青花皿 B2 群や E2 群は出土していません。

さらに、国産陶器では瀬戸美濃焼を見ると大窯 1～2 段階の製品が中心となっており、備前焼擂鉢も口縁帯が直立する間壁編年のⅣ期後半から口縁帯外面に凹線の巡るⅤ期の製品が主体を占め、や

や年代観にズレがあります。ちなみに城下では天正期に比定される体部に斜め擂目を持つ擂鉢が多く見られるのに対して、城館内では少量です。

何故こうした現象が起きているのか、今後の調査を通じて解明されるべき課題です。

３．遺跡の特異性

（１） 居館の内と外との相違

居館の内と外とに大きく相違の見られた点は、かわらけの出土割合である。勝瑞館跡内の遺物組成は第１表のとおりですが、かわらけは全体の 90%前後を占めます。それに対し、城下では第３表に示したとおり No.9 で 60.42%、No19 で 35.67%となっています。

種類		中国磁器																				朝鮮	
		青磁					白磁				青花												
遺跡・遺構名	分類 / 年代	細線蓮弁文碗	無文内湾碗	波状文碗	稜花皿	景德鎮系碗皿	皿B群	皿C群	皿D群	杯D群	B群碗	D群碗	C群碗	E群碗	B1群皿	C群皿	B2群皿	E1群皿	E2群皿	華南系碗・皿	徳利	碗
勝瑞館跡 A(枯山水庭園)	～1582	8.75%	2.50%	-	2.02%	0.58%	-	20.70%	1.25%	2.31%	1.93%	0.29%	8.67%	1.54%	4.62%	3.47%	-	0.10%	-	4.33%	4.82%	-
勝瑞館跡 B(北東部)		2.66%	1.06%	-	2.13%	0.53%	-	25.89%	0.35%	5.50%	-	0.35%	10.46%	2.31%	8.16%	3.19%	-	-	-	11.86%	2.66%	0.18%
勝瑞館跡 C(南東部)		6.67%	6.43%	-	5.58%	0.48%	-	13.46%	0.48%	2.42%	0.36%	0.12%	3.27%	1.09%	5.82%	1.09%	-	-	-	3.03%	11.76%	-
勝瑞館跡 D(北西部)		7.42%	1.95%	-	1.56%	2.34%	-	19.77%	-	3.64%	1.30%	0.39%	8.07%	1.30%	3.97%	1.43%	-	0.26%	-	5.85%	7.81%	-
勝瑞館跡 E(北部)		8.16%	1.63%	-	3.27%	-	-	20.41%	-	1.63%	-	-	3.27%	2.15%	6.12%	0.82%	-	0.82%	-	1.63%	3.27%	-
勝瑞館跡（池泉庭園）		◎	◎		◎			◎		○		○	◎	○	◎	○				○	○	○
以下は、柴田 2001 より転載																						
湯築城跡第2段階	(1530年代～16世紀中葉)	◎	○	◎	○	◎	○	◎	○	○	○	○	◎		◎	◎		○		○	○	○
見近島城跡	(16世紀中葉)	○	○	○	○	◎	○	◎	○	○	○	◎	◎		◎	○		○		○	○	
新宮党館	1537～1554	○	○	◎	○	◎		○	○	○		○	◎		○	○		○		○	○	
冨田川河床SK01	(16世紀中葉)	○		○		◎			○						○	○	◎	◎				○
大内氏館SE02以外	～1557か	◎	○		○	○		◎	○		○		◎	○	○	○	○	○			○	
大内氏館SE02	～1569か	○	○		○	○		◎	◎				○	◎	◎	◎	○		○		○	
観音寺城跡	～1568か	○	○	○	○	○		◎	○	○		○	◎	◎	○	○	○	○		○	○	
一乗谷朝倉氏遺跡	～1573	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○
小谷城跡	～1576	○	○			○	○	◎	○	○	○	○	◎	◎	◎	○	○	○	○	○	○	
大坂城石山本願寺期	16世紀中葉～1580	○						○	○				○	○	○	◎		○		○		
根来寺	～1585	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	◎	○	○	○	○	◎	○	○	○
長浜下村郷下層	～1586					◎		◎	◎					○	◎				◎	◎		◎
大坂城豊臣前期	1580～1598							○						◎	○	○	○		○	◎		○
万徳院	1574～1600							○	○					◎					◎	◎		
吉川元春館	1583～1600	○				○		○					○	◎	○	○	○	○	◎	◎	○	○

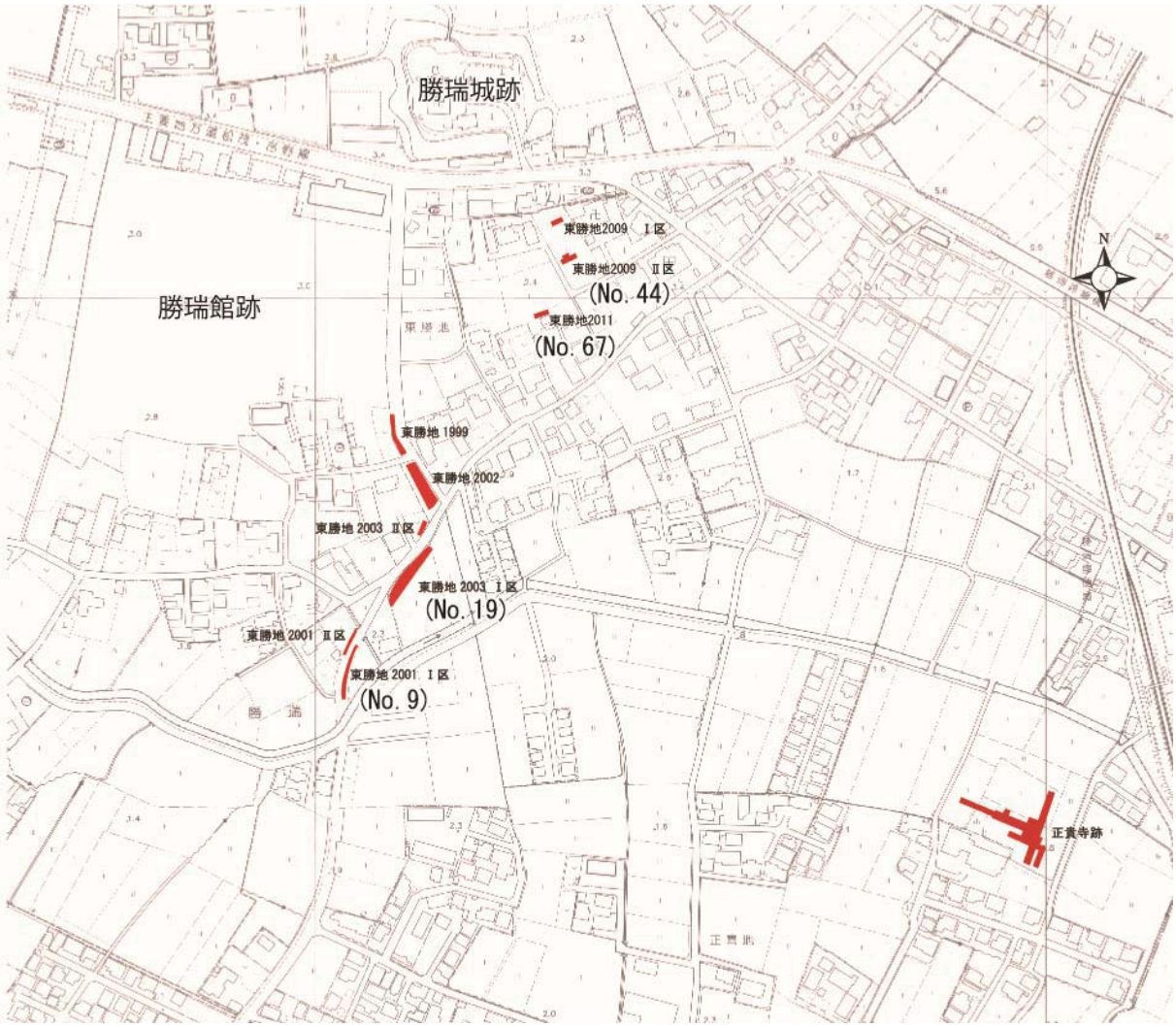
※分類は、小野分類（小野 1982）を基本とする。

第２表　勝瑞城館跡とその他の遺跡出土輸入陶磁器

調査区	地点	京・土師器皿		ﾛｸﾛ・土師器皿、杯		鍋・釜		備前		瀬戸美濃		青磁		白磁		青花		その他		合 計
東勝地2001（Ⅰ区）	No.9	568	54.56%	61	5.86%	68	6.53%	194	18.64%	33	3.17%	23	2.21%	48	4.61%	39	3.75%	7	0.67%	1,041
		60.42%																		
東勝地2003（Ⅰ区）	No.19	518	32.13%	57	3.54%	155	9.6%	532	33.00%	57	3.54%	19	1.18%	137	8.50%	137	8.50%			1,612
		35.67%																		
東勝地2009（Ⅱ区）	No.44	2,716	74.90%	535	14.75%	145	4.00%	158	4.36%	8	0.22%	30	0.83%	21	0.58%	13	0.36%	116	3.20%	3,626
		89.66%																		
東勝地2011	No.67	131	19.2%	284	41.5%	45	6.6%	141	21%	4	0.6%	25	3.7%	17	2.5%	14	2.0%	23	3.4%	684
		60.67%																		

※地点の No. は、第 11 図の No. と対応

第３表　勝瑞城下の出土遺物組成



第 4 図　勝瑞城下の発掘調査地点

（2）　周辺地域（支城など）との相違

周辺地域との最大の相違は、京都系かわらけの有無です。

勝瑞城館跡及びその城下では京都系かわらけは、かわらけの出土量の 30%から多いところでは70%以上となる。それに対して、徳島県下で京都系かわらけの出土した遺跡をあげると、黒谷川宮ノ前遺跡や田上遺跡、徳島城下町遺跡、丈六寺内遺跡等があります、細川氏の菩提寺である丈六寺内遺跡を除くと出土量はいずれも数点～十数点程度で、その差は明確です。

また、遺構を見ると、庭園遺構は勝瑞で検出されているのみで、建物跡も勝瑞ではほとんどが礎石建物であるのに対し、周辺地域では掘立柱建物となっています。

４．まとめ

（1）　居館整備、作庭の契機と画期

居館整備、作庭の契機と画期としてあげられるのは、まず三好氏の勝瑞居住であると考えられます。前にも記したとおり、16 世紀前半の三好元長の頃には勝瑞居住がうかがわれます。勝瑞に馬木の地名が残っていますが、その由来は脇町の馬木で、見性寺とともに寺の周辺住民も勝瑞に移されたのではないかと考えられています。そして、このことは勝瑞に三好氏の一大拠点を築くことにな

り三好氏にとって大きな画期となったとされています（天野 2014）。

三好元長死後は長慶の本宗家と、実休の阿波三好家に分かれます。実休は天文 22 年(1553)に守護の細川持隆を殺害し、実質上阿波の実権を握ることになります。発掘調査ではこれ以後の時期に勝瑞城館が拡張、整備されていく様子がうかがわれ、ここにも大きな画期を認めることができます。

さらに、天正 8 年(1580)～10 年(1582)頃には城主のめまぐるしい変遷が見られます。当時、阿波は親信長派の長宗我部元親に侵攻されていました。三好長治没後に反信長派として阿波三好家を再建した十河存保でしたが、信長や秀吉と通じ、長宗我部元親や一宮成助を引き込んだ篠原松満らと対立することにより、讃岐へ退去することになります。このとき、一宮成助が勝瑞に入ります。しかしその一方で、信長と本願寺の和睦が進んでいましたが、和睦に反対して本願寺を退去した牢人や紀伊・淡路の軍勢が勝瑞を奪い取り籠城してしまいます。これに対して秀吉は、黒田官兵衛らを阿波へ派遣して勝瑞を攻略します。しかし、阿波への介入はさほど深入りしなかったため、最終的には天正 9 年(1581)1 月には十河存保が勝瑞を奪還することとなります。さらに、その翌年の天正 10 年には土佐の長宗我部氏の勝瑞侵攻もあり、戦国時代を通じて軍勢が迫るような危機的な状況がなかった勝瑞に、信長による広範な地域を巻き込む大規模な戦争が迫り、勝瑞の要塞化が現実的な問題としておこったと分析されています（天野 2014）。

（２） 今後の調査・整備の方向性

勝瑞城館跡の調査・整備は、平成 14 年 7 月に設立された「藍住町勝瑞城館跡調査整備検討委員会」で検討されています。その方向性は、平成 17 年度末に策定された「守護町勝瑞遺跡整備計画基本構想」によって短期・中期・長期のビジョンが示され、第 1 期の整備計画が平成 18 年度末に策定されました。整備は勝瑞城館跡をいつかのエリアに分け、それぞれの方針によって進めます。今までに勝瑞館跡の西側半分の地区の整備が進められ、平成 21 年度・22 年度に枯山水庭園と礎石建物跡 SB1001 の整備を完了しました。第 1 期整備は平成 27 年度までの予定で、勝瑞館跡の西半分の整備がほぼ完了します。

２期の整備計画は平成 24 年度末に策定し、池泉庭園及び礎石建物跡 SB2001 の復元整備を検討しています。平成 27 年度は、池泉庭園と礎石建物跡 SB2001 の再調査を実施しており、今年度以降整備の内容を検討します（池泉庭園のエリアは平成 34 年完成予定）。

写真 2　整備した枯山水庭園と礎石建物跡 SB1001

（３） 課題と展望など

勝瑞城館跡は、全体像が明らかとなっていない中で整備が進められています。今後も周辺部も含めた発掘調査を継続し、それぞれの地域の全体の中での位置づけを明確にする必要があります。

〈参考文献〉

本田昇 1966 「勝瑞城跡の地理的研究」『LOTUS 立正大学教養部論集』2 号 立正大学教養部

羽山久男 1976 「守護町勝瑞の復原的研究」『高校地歴』12 号 徳島県高等学校教育研究会地歴学会

小野正敏 1982 「15～16 世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

柴田圭子 2001 「16 世紀中葉の輸入陶磁器の再評価」『中世土器研究論集－中世土器研究会 20 周年記念論集』 中世土器研究会

仁木宏 2014 「中世都市史における勝瑞の歴史的位置」『勝瑞－守護町勝瑞検証会議報告書』徳島県教育委員会

天野忠幸 2014 「戦国期阿波の政治史から考える勝瑞」『勝瑞－守護町勝瑞検証会議報告書』徳島県教育委員会